

山梨県指定史跡  
武田勝頼の墓  
— 経石出土に伴う総合調査報告書 —



2010年  
甲州市教育委員会

山梨県指定史跡  
**武田勝頼の墓**  
— 経石出土に伴う総合調査報告書 —

2010年  
甲州市教育委員会

## 序

平成17年11月に誕生した甲州市は、戦国時代の雄・武田家に関わる多くの名所旧跡があり、また、豊富な文化財が保存されている市でもあります。勝沼町に所在する勝沼氏館跡は武山信虎の弟・勝沼五郎信友の居館跡で、国の史跡に指定されており、塩山小屋敷の乾徳山恵林寺は武田信玄の菩提寺として知られ、境内には県の史跡である武田晴信の墓が建立されています。

そんな名門武田家の終焉の地が大和町田野地区であり、一族の慰靈のために創建されたのが天童山景德院です。

平成18年12月、景德院が実施した県指定史跡・武田勝頼の墓保存修理事業の最中、供養塔の基壇内から多量の経石が出上り、中でも「景德院殿頼山勝公大居士」と、勝頼の戒名をはじめ北条夫人・嫡男信勝の戒名が記された経石の発見は、非常に大きな話題となりました。

甲州市教育委員会ではこの機会に武田勝頼の墓について総合的な調査を実施すべく、19年度から21年度までの継続事業として、発掘調査や経石の分析などに取り組んできました。本書は、これまでの調査により判明したこと、推測されることなどについて記述しています。多くの方にご一読いただき、ご意見・ご批判をいただければ幸いです。

本事業実施のため、景德院ならびに景德院檀家総代会の皆様には、特段のご理解ご協力を賜りました。調査期間中は墓の保存修理事業も中断せざるを得ず、そのため完成が平成21年12月まで伸びてしまいました。改めてお詫び申し上げますとともに、これまでにいただいたご温情に感謝申し上げ、あいさつといたします。

平成22年3月31日

甲州市教育委員会

教育長 古屋正吾

## 例　　言

1 本書は、平成18年度から21年度まで実施した、甲州市大和町田野389、曹洞宗天童山景德院境内に所在する、山梨県指定史跡「武田勝頼の墓」総合調査の報告書である。

2 調査は甲州市教育委員会が行った。調査体制は次のとおりである。

古屋正吾 甲州市教育委員会 教育長

三科 茂 甲州市教育委員会 生涯学習課長(18年度)

小澤裕二 同上 (19年度)

古屋公男 同上 (20・21年度)

村田一信 甲州市教育委員会 生涯学習課 文化財担当リーダー(18年度)

三森慎一 同上 (19年度)

室伏 徹 同上 (20・21年度)

飯島 泉 甲州市教育委員会 生涯学習課 文化財担当

杉本悠樹 同上 (18年度)

雨宮 亨 同上 (20・21年度)

人江俊行 同上 (21年度)

3 各年度の調査の概要は、次のとおりである。

18年度……幕石塔解体に伴い基壇内部から出土した経石の記録・取り上げ調査

19年度……経石の整理と台帳作成

20年度……経石の整理と台帳作成

　　経石に記される經典について、法華經等との照合

　　武田勝頼の墓及び甲冑殿(御靈屋)周辺の発掘調査

21年度……20年度に出土した柱状木製品の保存処理

　　報告書編集・出版

4 19年度の経石整理作業及び21年度の柱状木製品の保存処理は委託業務とし、財団法人山梨文化財研究所に委託して実施した。

5 本書の原稿執筆・編集は、飯島泉(甲州市教育委員会生涯学習課文化財担当)が行った。

6 図版10～13の経石出土状況の合成写真は、杉本悠樹(富士河口湖町教育委員会)が作成した。

7 調査から報告書編集まで、次の方々からご指導ご協力をいただいた。記して謝意を表するものである。

調査指導助言 「武田勝頼の墓」整備検討委員会 米山俊應(景德院住職)・

萩原三雄・清雲俊元・小野正文・田代孝・都倉義男・畠大介

景德院檀家総代会・山梨県教育委員会学術文化財課、

山梨県埋蔵文化財センター、山梨県立考古博物館、山梨県立博物館、  
石神孝子、今福利恵、佐本久、一志和彦、勝山一郎、五味博、設楽昌吾、十賀駿武、  
末木健、高野玄明、竹村雅夫、谷口一夫、新津健、野代幸和、平山優、保坂和博、  
保坂康夫、宮里学、八巻與志夫、  
有限会社歴史環境研究所、昭和測量株式会社、藤造園建設株式会社  
調査・整理関係　雨宮久美子、長田美代子、沢登淳子、戸田ひろ、深沢茂子、  
柴原礼子、手塚理恵、早川俊子、正木なつ子、萩原里江子、吉川美穂

※順不同

## 凡　　例

1 武田勝頼の墓は、勝頼の供養塔である宝篋印塔1基(中央)、北条夫人の供養塔である五輪塔1基(勝頼の右側)、嫡男信勝の供養塔である五輪塔1基(勝頼の左側)、さらに左右脇に1基ずつの殉難者供養塔2基、計5基の石塔からなり、本書ではそれぞれ「勝頼宝篋印塔」「北条夫人五輪塔」「信勝五輪塔」「左手殉難者供養塔」「右手殉難者供養塔」と呼ぶ。

2 石塔が据えられる基壇は3基あり、本書では勝頼宝篋印塔・北条夫人五輪塔・信勝五輪塔が据えられる長方形の基壇を「中央基壇」、中央基壇の右側に接し、右手殉難者供養塔が据えられる正方形の基壇を「右基壇」、中央基壇の左側に接し、左手殉難者供養塔が据えられる正方形の基壇を「左基壇」と呼ぶ。

3 経石には取り上げ時に固有の番号を付けた。最初のアルファベットは石塔の位置を示し、アルファベットに続く数字は取り上げた層を、ハイフン後の3桁数字は取り上げ層内の番号である。

K Y ……勝頼塔 (中央基壇)  
H J ……北条夫人塔 (中央基壇)  
N K ……信勝塔 (中央基壇)  
R ……右手殉難者供養塔 (右基壇)  
L ……左手殉難者供養塔 (左基壇)

4 発掘調査による土壙断面図等は基本的に1/40とした。また、特記経石の実測図は1/2とした。

5 本書第1図は国土地理院発行の1/200,000地勢図「甲府」及び1/25,000地勢図「笹子」を、第2図は甲州市都市計画基本図を、第3図は国土地理院発行の1/25,000地勢図「笹子」を、それぞれ使用した。

6 出土した経石は、整理台帳とともに全て甲州市教育委員会で保管している。

7 個々の経石のデータは整理台帳にまとめられているが、複製が困難であるため、PDF化しDVD1枚に収め、本書に付録として添付した。DVD及び写真データ等が入るCDの使用については、取扱い説明書を参照されたい。

# 目 次

序	第 4 節 発掘調査の成果
例言・凡例	1 砂疊層の検出.....38
第 1 章 調査に至る経緯と経過	2 基壇の状況.....38
第 1 節 経緯.....1	3 中央基壇の版築状互層.....40
第 2 節 経過.....1	4 柱状木製品と土壤について.....40
第 2 章 「武田勝頼の墓」位置と環境	第 5 章 考察
第 1 節 地理的環境.....2	第 1 節 経石整理及び調査の成果から.....42
第 2 節 歴史的環境.....2	1 経石数の確定.....42
第 3 節 天童山景德院	2 経石の石材について.....43
1 武田家滅亡.....7	3 経石に写經された經典.....43
2 滅亡直後の状況.....7	4 接合經石からみる写經から 埋納までの流れ.....55
3 景徳院の建立.....8	第 2 節 中央基壇と左右基壇の違い.....55
4 勝頼「百年遠忌法要と 「武田勝頼の墓」.....11	第 3 節 中央基壇供養塔の並び方.....57
第 3 章 調査の概要	第 4 節 文献からみた武田勝頼の墓と 「百年遠忌」.....59
第 1 節 平成18年度の調査	1 「峠中紀行」.....59
1 経緯と経過.....12	2 「甲斐国志」.....59
2 記録・取り上げ調査参加者.....12	3 「勝沼古事記」.....60
3 調査の概要.....12	4 「保坂家文書」.....61
第 2 節 平成19年度の調査	第 5 節 二百年遠忌と山門建立.....62
1 経緯と経過.....19	第 6 章 総括
2 業務委託者、作業参加者.....19	第 1 節 経石について.....63
3 業務及び作業の概要.....19	第 2 節 武田勝頼の墓所について.....63
第 3 節 平成20年度の調査	第 3 節 占戦場としての景德院.....65
1 経緯と経過.....21	第 4 節 まとめ.....65
2 業務委託者、作業参加者.....21	
3 調査の概要.....22	
第 4 節 平成21年度の事業.....22	
第 4 章 発掘調査の概要	
第 1 節 発掘調査の方法.....24	
第 2 節 各トレンチの名称.....24	
第 3 節 各トレンチの状況	
1 Eトレンチ.....24	
2 Wトレンチ.....32	
3 Nトレンチ.....32	
4 Cトレンチ.....36	

## 挿図目次

第1図 天童山景徳院位置図(1/400,000、1/50,000)…	3
第2図 天童山景徳院周辺図(1/2,500)…	4
第3図 周辺遺跡等分布図(1/40,000)…	5
第4図 武田勝頼の墓周辺図(1/400)…	9・10
第5図 武田勝頼の墓 修理前平面図・立面図(1/100)…	14
第6図 武田勝頼の墓基壇平面図(1/50)…	15・16
第7図 基壇土層断面図及びエレベーション図(1/25)…	17・18
第8図 発掘調査トレンチ配置図(1/200)…	25
第9図 石垣平面図及び立面上Eトレンチ配置図(1/50)…	27・28
第10図 E 1 トレンチ東壁及びE 1 N トレンチ 東壁・北壁土層断面図(1/40・1/20)…	29・30
第11図 E 1 トレンチ柱状木製品出土状況図(1/20)…	31
第12図 E 2・E 2 S・E 2 N トレンチ土層断面図(1/40)…	31
第13図 W 1・W 1 N トレンチ東壁・ 西壁土層断面図(1/40)…	33・34
第14図 W 2 トレンチ西壁土層断面図(1/40)…	33・34
第15図 N 1・N 2 E・N 2 W トレンチ石列平面図(1/40)…	35
第16図 N 1・N 2 E・N 2 W トレンチ北壁・ 南壁土層断面図(1/40)…	35
第17図 N 3 トレンチ南壁土層断面図(1/40)…	35
第18図 C 2 トレンチ土層断面展開図(1/40)…	37
第19図 C 1 N トレンチ平面図及び西壁土層断面図、 C 1 S・C 3 トレンチ西壁土層断面図(1/40)…	37
第20図 砂疊層検出トレンチ分布図(1/200)…	39
第21図 柱状木製品実測図(1/4)…	41
第22図 K Y 4 - 0 4 3 (1/2)…	45
第23図 K Y 4 - 0 6 2 (1/2)…	46
第24図 K Y 7 - 1 4 3 (1/2)…	46
第25図 K Y 1 0 - 0 0 9 (1/2)…	47
第26図 R 1 - 0 0 1 (1/2)…	48
第27図 R 3 - 0 0 4 (1/2)…	50
第28図 L 1 - 0 8 7 (1/2)…	50
第29図 L 2 - 0 0 1 (1/2)…	51
第30図 L 2 - 0 4 5 (1/2)…	52
第31図 L 2 - 0 4 9 (1/2)…	53
第32図 L 2 - 0 8 6 (1/2)…	54
第33図 各基壇の積み方…	56
第34図 左右基壇の上段石…	56
第35図 中央基壇中段石と仕切り石による右室…	57

## 表目次

表1 周辺遺跡一覧…	5
表2 取り上げ経石数一覧…	13
表3 接合経石一覧…	23
表4 経石出土地点数…	42
表5 特記経石一覧…	44

## 写真目次

写真1 楢雲寺開山宝篋印塔…	2
写真2 四郎作跡…	6
写真3 鳥居烟古戦場跡…	6
写真4 土原惣藏片手斬跡…	6
写真5 没頭地蔵…	7
写真6 景徳院…	8
写真7 甲将殿…	8
写真8 武田勝頼の墓…	9・10
写真9 勝頼塔身銘…	11
写真10 塔身・地輪の損傷…	11
写真11 経石取り上げ調査…	13
写真12 経石整理台帳…	20
写真13 経石補修作業…	20
写真14 整備検討委員会(20年7月10日) (20年10月8日)(20年11月5日)…	21
写真15 版築状況…	40
写真16 W 1 N トレンチから掘り出された疊…	43
写真17 雨沢上流部の鉄平石露頭…	43
写真18 中央基壇の経石室…	57
写真19 中火葬塚の台座比数…	57
写真20 各供養塔台座の比較…	58
写真21 保坂家文書…	61
写真22 景徳院山門と山門扁額…	62
写真23 甲将殿…	64
写真24 保存修理完了後の墓…	64
写真25 甲将殿内の坐像…	64
写真26 勝頼牛苦石・北条大人生害石…	64
写真27 武田勝頼の墓域…	65

## 図版リスト

- 図版1 平成18年度 武田勝頼の墓全景  
図版2 右基壇経石出土状況  
図版3 右基壇調査状況  
図版4 左基壇経石出土・調査状況  
図版5 中央基壇調査前  
図版6 中央基壇経石出土状況  
図版7 中央基壇経石出土状況2  
図版8 中央基壇経石出土状況3  
図版9 中央基壇経石出土状況4・調査風景  
図版10 中央基壇経石出土状況5(7層・8層)  
図版11 中央基壇経石出土状況6(11層・12層)  
図版12 中央基壇経石出土状況7(13層・14層)  
図版13 中央基壇経石出土状況8(15層・16層)  
図版14 特記経石1(KY4-043・KY4-062)  
図版15 特記経石2(KY7-143・KY10-009)  
図版16 特記経石3(R1-001)  
図版17 特記経石4(R3-004・L1-087)  
図版18 特記経石5(L2-001・L2-045)  
図版19 特記経石6(L2-049・L2-086)  
図版20 平成20年度 武田勝頼の墓発掘調査前  
図版21 E1トレンチ1  
図版22 E1トレンチ2  
図版23 E1トレンチ3・E1Nトレンチ・  
E1トレンチ出土柱状木製品  
図版24 E2トレンチ・E2Nトレンチ・E2Sトレンチ  
図版25 W1トレンチ・W2トレンチ・W1Nトレンチ  
図版26 N1トレンチ・N2Eトレンチ・  
N2Wトレンチ・N3トレンチ  
図版27 C1Nトレンチ・C1Sトレンチ・  
C2トレンチ・作業風景・現場説明会風景

# 第1章 調査に至る経緯と経過

## 第1節 経緯

天童山景德院(米山庵庵住職)では、平成18年度に県費補助事業として、県指定史跡である「武田勝頼の墓」の保存修理事業を計画し、平成18年12月に工事着手した。手順として石塔類の解体をまず行い、その後石塔が乗る基壇の解体に際しては、土が充填されているものとみられるため、教育委員会が立会い慎重に基壇石を解体する予定でいた。

右手の殉葬者供養塔の解体が進み、台座を吊り上げたところ、基壇内に石が充填されていた。土や砂で覆った様子ではなく、隙間から入ったホコリが石の表面に付着しており、小動物が持ち込んだと思われる枯葉や木の実が散らばっていた。

中央付近に置かれた平らな石の表面のホコリを刷毛で払ったところ、明瞭に「景德院殿頼山勝公大居士」の墨書が現れ、周りの石にも墨書が確認された。そのため平成18年12月19日から、経石の記録と取り上げ作業を開始した。

## 第2節 経過

### 平成18年度

- 平成18年12月4日 武田勝頼の墓保存修理工事着手。  
平成18年12月18日 墓の石塔解体時に経石出土。  
平成18年12月19日 市内遺跡発掘調査等事業により経石取り上げに着手。  
平成19年1月26日 経石取り上げ完了。  
平成19年3月31日 20年度以降発掘調査等を実施する計画のため、石塔については別の場所に仮安置し、基壇石については養生・保存し、武田勝頼の墓保存修理工事を終了する。

### 平成19年度

- 平成19年8月16日 武田勝頼の墓整備検討委員会で協議し、経石出土を契機として、経石の整理や墓周辺の発掘調査等を実施するよう計画変更を行うこととなる。  
平成19年12月10日 経石に係る埋蔵物発見届・埋蔵物保管書を下部警察署へ、埋蔵文化財保管証を山梨県教育委員会へ、それぞれ提出する。  
平成20年1月15日 市内遺跡発掘調査等事業の計画変更承認申請書を文化庁へ提出する。  
平成20年2月12日 計画変更承認及び変更交付決定が文化庁より下る。  
平成20年2月20日 経石整理業務について財団法人山梨文化財研究所と業務委託契約を締結する。  
平成20年2月21日 勝頼の墓周辺地形測量業務について昭和測量株式会社東京支店と業務委託契約を締結する。

### 平成20年度

- 平成20年4月 市内遺跡発掘調査等事業により経石整理作業を継続する。  
平成20年8月26日 勝頼の墓周辺の発掘調査に着手。  
平成20年9月 経石整理台帳の追記を行う。  
平成20年11月1日 発掘調査について現場説明会を開催する。  
平成20年11月5日 発掘調査完了。  
平成21年3月2日 経石実測業務について、財団法人山梨文化財研究所と業務委託契約を締結する。

## 平成21年度

- 平成21年9月28日 景徳院事業として、勝頼の墓保存修理工事を再開する。
- 平成21年11月20日 保存修理工事において基壇が完成し、新たな経石の埋納式を行い、約3,000人から協力を得た「平成の経石」を埋納する。
- 平成21年12月7日 保存修理工事完了。

## 第2章 「武田勝頼の墓」位置と環境

### 第1節 地理的環境

武田勝頼の墓のある天童山景德院は、甲州市大和町田野389に所在する。平成17年11月の市町村合併による新市発足以後、「甲州市大和町」と表記されるが、旧名は東山梨郡大和村である。

旧大和村は甲府盆地の東縁に位置する。大菩薩連嶺を源とする日川に沿って開けた地域であるが、江戸時代には甲州街道が通り、鶴瀬地区には口留番所が、駒飼地区には本陣が置かれていた。明治に入ると笛子峠にトンネルが掘られ鉄道が開通し、さらに昭和に入ると中央道が通るなどして、現在に至っている。今も昔も、甲府と大月などの郡内地域、さらに東京との往来では必ず通過する地であることには変わりなく、当地域の役割は大きい。田野地区は、国道の笛子トンネルの手前から東進・北上し、大菩薩峠に至る道の途上にある。山裾に開けた集落で、これより先は木賊地区まで集落はない。

### 第2節 歴史的環境

旧大和村の中では29件の埋蔵文化財包蔵地が確認されているが、田野地区には7件が所在する。このうち発掘調査が実施されているのは、景德院に最も近い田野平遺跡である。

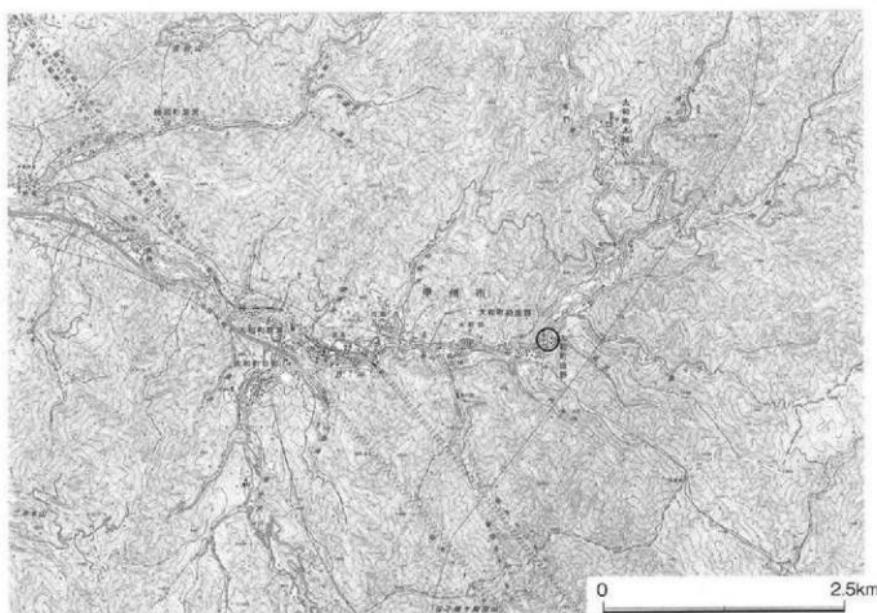
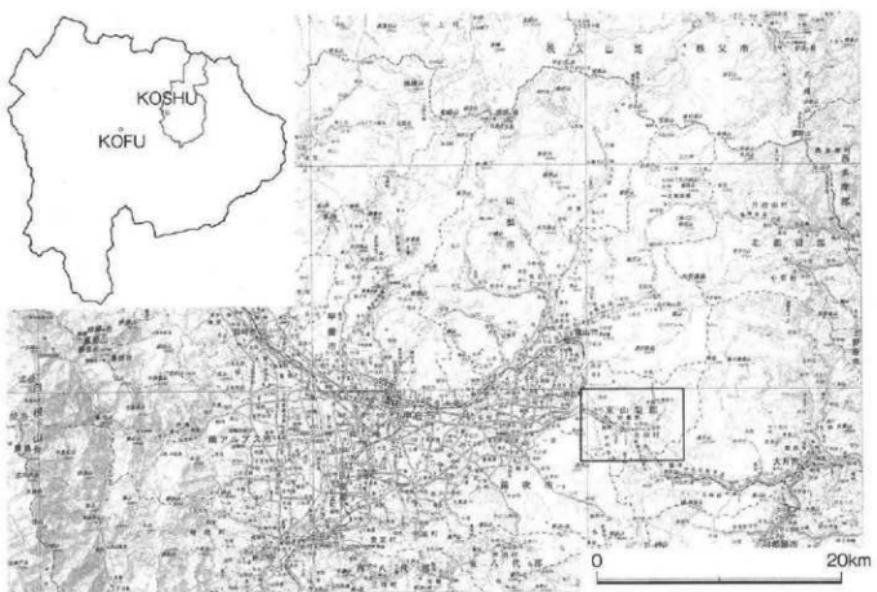
田野平遺跡は、景德院の東側高台に多目的研修集会施設（鍊成館）を建築するに当たり、昭和59年に旧大和村教育委員会が発掘調査を行ったもので、平安時代の住居址4軒と同時期と思われる土塙35基が検出されたほか、旧石器時代、绳文時代の遺物も出土している。

遺跡ではないが、田野地区を北上し、最も奥まった集落である木賊地区には、臨済宗建長寺派の寺院・天目山栖雲寺が所在する。栖雲寺の開山・柔海本淨は、渡元し杭州天目山幻住庵の中峰明本（普応国師）に参禪し、帰國後貞和4年（1348）に当地に寺を興した。寺には重要文化財である木造普応国師坐像をはじめ、木造彌海本淨坐像、栖雲寺銅鐘など県指定文化財が豊富に保存されている。中でも境内に安置されている栖雲寺宝篋印塔（県指定）は、文和2年（1353）の銘がみえ、県内で最も古いみかけ石製の石塔とされる。その直下から掘り出された常滑大甕（栖雲寺開山墓出土常滑甕：県指定）は、具体的な制作年代が推定でき、常滑甕の編年資料として知られている。また、栖雲寺開山宝篋印塔（県指定・写真1）は觀応3年（1352）の作である。

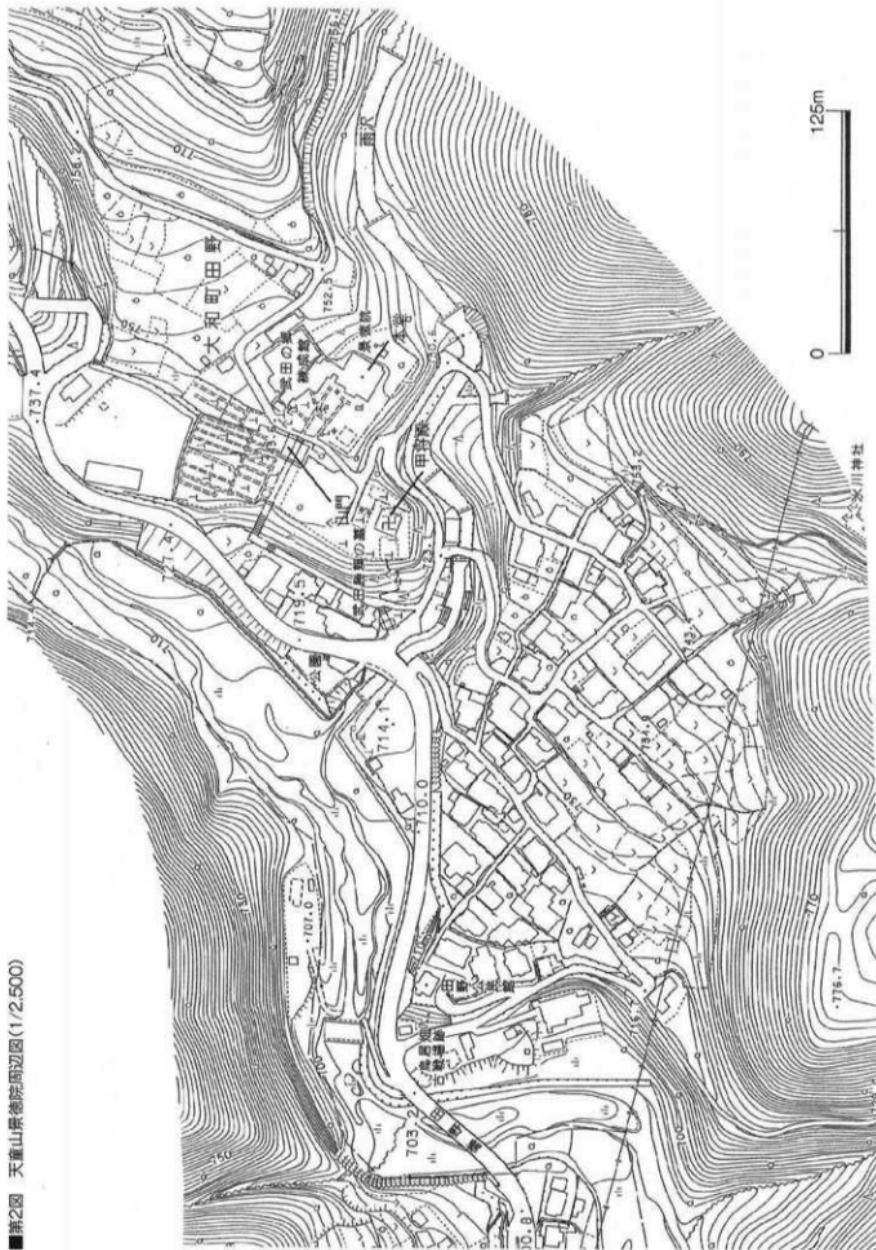
武田勝頼の墓に関して、近くには古戦場として「四郎作跡」「鳥居畑古戦場跡」「土屋惣蔵片手斬跡」が所在し、それぞれ石碑が立つ。各古戦場の概略を『大和村の文化財』（村制施行60周年記念事業 大和村教育委員会 平成15年3月）から引用する。



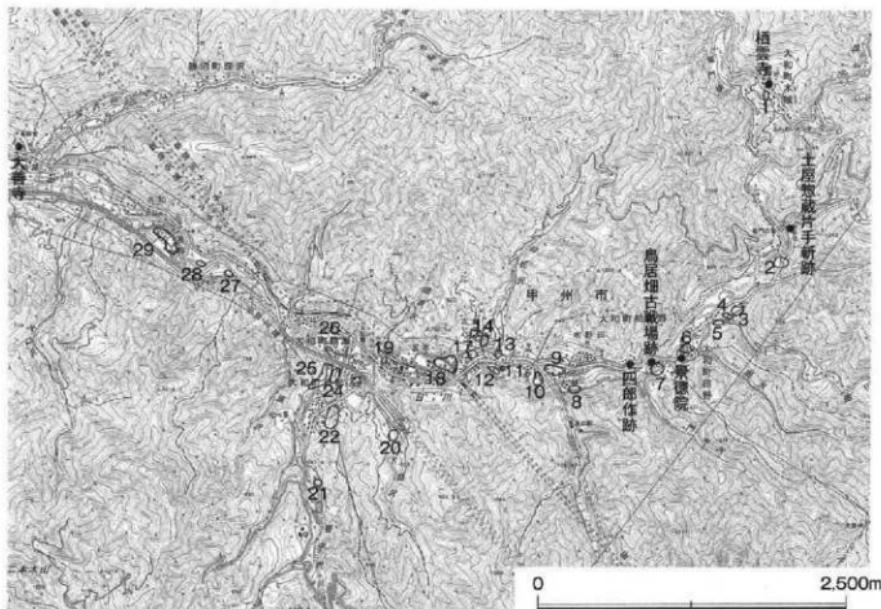
■写真1 栖雲寺開山宝篋印塔



■第1図 天童山景德院位置図(上:1/400,000、下:1/50,000)



■第2図 天童山県立公園周辺図(1/2,500)



■第3図 周辺遺跡等分布図(1/40,000)

■表1 周辺遺跡一覧(『大和村史』より)

遺跡名	時代	遺物	備考
1 大門下	平安末・中世	土器片	
2 大明神	平安・中世	土器片・内耳土器片	
3 下久保賀田A	平安・中世	土器片	
4 下久保賀田B	縄文・平安	土器片	山梨県埋蔵文化財包蔵地分布調査の下久保賀田遺跡に当る
5 山口	縄文・古墳・奈良・平安・近世	土器片	山梨県埋蔵文化財包蔵地分布調査の山口遺跡に当る
6 田野平	旧石器・縄文・平安	石器・土器	「田野平遺跡」1984年3月 日本大学文理学部史学研究室
7 村平	縄文後期・中世・近世	土器片・内耳土器片・かわらけ片	
8 向山	縄文後期(?)・中世	土器片	
9 丸林中林	中世・近世	かわらけ片	
10 岩下道万	中世・近世	土器片	
11 舟鄭道下A	中世	土器片	
12 下川戸	中世・近世	土器片	
13 舟鄭道下B	平安末	土器片	
14 無頬	縄文中期・中世・近世	土器片	
15 三鶴神社		小刀	
16 古部	中世	土器片	
17 天神原	平安・中世(?)	土器片	
18 西原	縄文後期(?)・平安・中世・近世	土器片	
19 何瀬	平安	土器片	
20 小路	縄文・平安・中世	土器片・かわらけ片	山梨県埋蔵文化財包蔵地分布調査の日影A遺跡に当る
21 古瀬桃	中世・近世(?)	内耳土器片	
22 上之山	平安・中世・近世	土器片	
23 白沢	縄文中期(?)		山梨県埋蔵文化財包蔵地分布調査の日影B遺跡に当る
24 上之段B	平安(?)		昔水田だった頃、掘ったら素焼きの土器が出たという
25 上之段A	縄文・中世	土器片	
26 西之原	縄文中期・近世	土器片	
27 芝	縄文中期・平安	土器片	
28 桜ノ木	縄文中期・中世	土器片・かわらけ片	
29 長持	時期不明	土器片	

#### ◆四郎作跡(写真2)

小宮山内膳友晴(友信)は武田家の重臣小宮山丹後守昌友の長男として出仕し、御使番十二人衆の一人として活躍していたが、奸言によって勝頼の勤気を蒙り幽閉の身となった。

天正10年(1582)3月、主家勝頼の危急存亡のときと察知した友晴は、累代の恩を忘れることなく落ち行く勝頼一行を追い、土屋惣藏の仲介により勝頼の許しを得て軍に加わり、最前線であるこの四郎作の地に陣をかまえて攻め寄せる敵と奮闘のち、最期まで主君をお守りし殉じたと伝えられている。後世幕末、水戸の儒学者藤田東湖は『正氣歌』で「或殉天目山幽囚不忘君」と、友晴を称えている。



■写真2 四郎作跡

#### ◆鳥居畠古戦場跡(写真3)

天正10年(1582)3月11日、武田勝頼の一行を追撃するために、門井沢や不動沢の駒飼口から攻め寄せる織田・徳川の先鋒隊川尻・滝川の軍勢4,000に対し、武田勢は秋山紀伊守・阿部加賀守ら100人に足らない少數でこれを迎えうち、撃退させること数度におよんだ激戦地である。多勢に無勢と、戦いは武田方に利なく全員戦死となつたが、この間に田野の勝頼一行は敵軍に攪乱されることなく死途についたと伝えられている。

地名の鳥居畠は、近くに鎮座する田野の産土神として祀られる氷川神社への参道入口で、一の鳥居のあったところから名付けられたといわれる。



■写真3 鳥居畠古戦場跡

#### ◆土屋惣蔵片手斬跡(写真4)

土屋惣蔵昌恒(弘治2~天正10)(1556~1582)は金丸虎義の第五子、15歳のとき土屋備前の養子となり土屋姓を名乗る。長篠の役で養父と養兄の戦死に逢い、敵陣に切り込もうとしたが勝頼に制止されて断念し、以降、侍大将として活躍する。

天正10年3月11日、峠北の新府城を出た武田勝頼一行は、郡内岩殿城を目指したが、行く手を阻まれやむなく天目山栖雲寺を目指して大藏原まで来たところ、行く手より追って来た辻弥兵衛軍のために先に進めず、田野の郷に引き返すこととなる。このとき、土屋惣蔵は主君の危機を救わんと山道の狭まつた岩かどに身を隠し、片手で藤づるにつかり、片手で迫りくる敵を斬って下の谷へ落としたと伝えられている。土屋惣蔵一人の奮闘により、勝頼一行は田野の郷までたどり着き、この地を最期の地としたのである。

両側からせまる崖に通ずる小道の、自然の橋に似たこの場所で攻め寄る敵を斬り倒し、その数は千人にもなったというところから、「土屋惣蔵片手千人斬り」と語りつがれ、谷を流れている溪流は、切られた敵兵の流した血湖で染まり、川の水は3日の間赤い色で流れたので、別の名を三日川とか、三日血川と呼ばれたといわれている。



■写真4 土屋惣蔵片手斬跡

### 第3節 天童山景德院

#### 1 武田家滅亡

武田勝頼は武田信玄の第四子である。天文15年(1546)、諏訪頼重の娘を母として諏訪に生まれ、諏訪四郎勝頼と名乗る。信玄没後天正元年(1573)に家督を継いだ。

天正3年(1575)5月、武田軍は長篠合戦で大敗し、以後勝頼は領土の拡大より領地の支配といった内政に力を入れるようになる。また、信州・駿府からの敵軍侵攻に備え、躑躅ヶ崎の館よりもはるかに見渡しやすい七里岩の台地に目をつけ、天正9年(1581)頃新府築城に着手した。1月に家臣への連絡を行い、2月には着工したものとされる。工事は昼夜兼行で続けられ9月には落成し、11月末頃から12月初頭頃に勝頼は新府城に移ったようである。

天正10年(1582)2月25日、武田の親族衆で富士川沿いの河内領を支配していた穴山信君が織田側に寝返り、3月3日に徳川家康とともに北上し入陣してきた。さらに信州の高遠城を落とした織田信忠が南下し、親族をはじめとした味方の多くが武田軍を見限り、勝頼の元から離れていった。勝頼はこの状況で新府城にて両軍を迎撃つことは困難とみて、郡内の巨城・岩殿城へ向かうべく、住み始めたばかりの新府城に火をつけた。一行が勝沼を過ぎたところ、小山田信茂も岩殿城入城を拒否し、勝頼の進退は窮まった。新府を出たときには500~600人ほどいたとされる従者は、このときには40~50人しかいなかったといわれる。

田野の地に着いた一行は、平屋敷に柵を設け陣所とした。3月11日、滝川一益が情報を聞きつけ、滝川益重・篠岡右衛門に命じて包囲させた。逃れがたいことを悟った勝頼は自刃して果てた。勝頼37歳、北条夫人19歳、嫡男信勝16歳であった。

#### 2 滅亡直後の状況

勝沼・大善寺に身を寄せていた理慶尼は、武田家の親族で信玄に謀反の疑いをかけられて滅亡した勝沼信元の妹である。勝頼は一行が岩殿城へ向かう途中大善寺に一泊した折、理慶尼と対面している。自身の家系を取り潰した者の跡取りであるにも関わらず、厚く遇しともに薬師如来に武運を祈ったという。数日後大善寺にて武田家滅亡の報を聞いた理慶尼は、勝頼没の5日後に田野の地に入り、そこで泣きながら遺体の処理をする三科某という侍をみたとされる。

一方、甲斐国曹洞宗總本山・中山広嚴院の住職・拈橋伝因も田野へ向かった。拈橋の兄は、謹慎の身にも関わらず主君勝頼の窮地を聞き、武田家に殉じた小宮山内膳友晴といわれている。戦場には敵味方の死体が累々としていたが、武田家の家臣は刀の中子に姓名を朱書きしているため、それを元に戒名をつけていた。勝頼親子の遺骸は、陣を張った高台の中腹に埋葬し、後に地元の人々が首のない3体の地蔵尊を墓碑として安置した。「没頭地蔵」と呼ばれ、境内の一画に祀られている(写真5)。



■写真5 没頭地蔵

### 3 景徳院の建立(写真6、写真7)

織田信長が本能寺の変で没すると、甲斐国は織田に代わって北条氏直と徳川家康が領地を争ったが、家康が甲斐国主に納まった。家康は甲斐国の安定化のため武田遺臣の懐柔策に力を入れ、武田遺臣の優遇、織田の兵火に焼かれた恵林寺等の復興を指示するとともに、武田遺臣・小幡勘兵衛に命じ、勝頼の菩提寺を田野の地に建立させた。建立にあたり田野郷一円を茶湯料として、一山を寺領として寄進した。当初「田野寺」と称したが、後に勝頼の戒名である「景德院」となった。天正16年(1588)に伽藍がほぼ完成したというが、本堂・庫裏・御靈屋・山門などが建ち並ぶ、壮大なものであったと伝えられている。第1世には、広嚴院住職であった拈橋がそのまま入ることとなったが、拈橋が亡くなると、たちまち無住となってしまい、広嚴院が兼帶する状態が続いた。

景德院は莊嚴な伽藍を誇ったが、弘化2年(1845)に火災に遭い、また、明治27年(1894)の田野の大火により、諸堂を失った。境内に残る最も古い建造物は、県の文化財にも指定されている安永8年(1779)建立の山門である。また、「甲将殿」と称する御靈屋は、明治27年の火災以後に再建された。

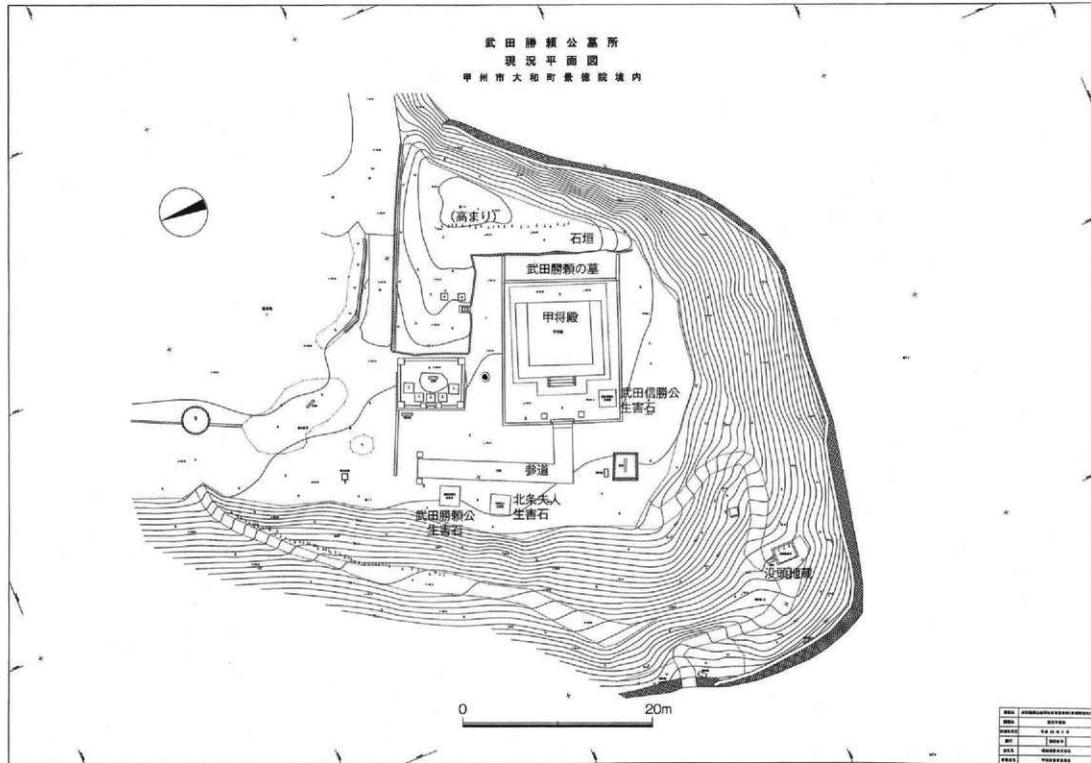
本堂・庫裏・鐘楼は昭和後期の再建であるが、それに先立つ昭和42年5月29日に「景德院境内」が県の史跡に指定された。



■写真6 景徳院



■写真7 甲将殿



■第4図 武田勝頼の墓周辺図(1/400)



■写真8 武田勝頼の墓

#### 4 勝頼二百年遠忌法要と「武田勝頼の墓」(写真8)

武田勝頼の墓は、御靈屋「甲将殿」の背後に建立されている。中央に勝頼の宝篋印塔、向かって右手に北条夫人の五輪塔、同じく左手に信勝の五輪塔の3基が、長方形の基壇に据えられ、その両脇には独立した正方形の基壇上に殉難者供養塔が2基据えられている。5基の石塔の背面には、高さ1.4mほどの石垣が積まれ、その上には歴代住職のものと思われる無縫塔が立ち並ぶ。

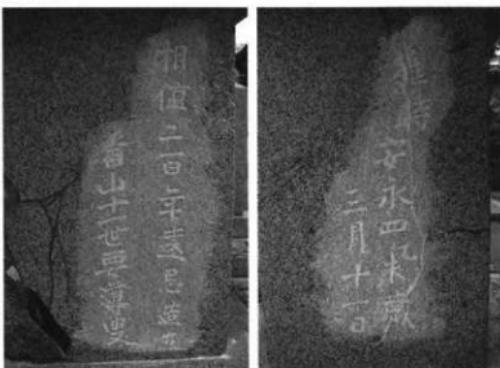
勝頼宝篋印塔の塔身側面に「相値二百年遠忌造立 當山十一世要導叟」「維時

安永四乙未歳 三月十一日」と刻まれ

ており、勝頼の命日である安永4年(1775)3月11日に、当時の第11世住職の要導が中心となり、二百年遠忌を営んだことが知られる(写真9)。

2度の火災で甲将殿が焼け、その度に被災したとみられる石材の欠損や剥離が著しく、無数のひびも認められる。特に宝篋印塔の隅脚が大きく欠損しており、各石塔の台座に彫られた蓮華も、正面側はひどい状態である。また、宝篋印塔の塔身・五輪塔の地輪の正面には同心円状のひびが入り、被熱後消火のための水をかけられた際に生じたものと思われる(写真10)。

昭和33年6月19日に県の史跡に指定され、より一層の厚い保護がされてきた。しかし、2度の被災による石塔の損傷が大きく、また、基壇の不整により石塔が傾いており、倒壊の危険性が指摘されてきた。そのため、平成18年度の景德院事業として、県費補助事業で墓の保存修理が行われた。その折、石塔解体時に多量の経石が基壇中から出土し、一連の調査の発端となった。



■写真9 勝頼塔身銘



■写真10 塔身・地輪の損傷

## 第3章 調査の概要

### 第1節 平成18年度の調査

#### 1 経緯と経過

景德院事業として武山勝頼の墓保存修理工事を実施中、右手殉葬者供養塔解体後基壇中から経石が出土した。そのため平成18年12月18日から、経石の記録と取り上げ作業を開始した。

右基壇と左基壇の経石は、縮尺2分の1の平面図を作成し、図面に番号を記しながら取り上げた。図面上の経石を取り上げ終わると、改めて清掃し、写真撮影を行い、2層目の平面図を作成した。この作業を繰り返し、第5層で一通りの経石の記録・取り上げが完了した。

中央基壇は当初、各石塔の台座の下にみえた土を掘り下げていき、20cmほどで経石が出土してからは、平面図ではなく写真に番号を記録しながら取り上げた。5層目を終えたところで、経石が上段及び中段の基壇の底に潜っているため、平成19年1月10日に基壇上段石を解体した。すると、基壇中段石で区画された石室全面に経石が埋納されている状況が確認できた。6層目から経石の取り上げ点数が急に増えるのは、そういう理由からである。経石の大量出土と、景德院事業としての勝頼の墓整備事業が進行している状況の中で、経石を取り上げずそのまま保存するという考えもあったが、整備事業により石材の折れや亀裂を補修する作業のため基壇は全解体する必要があり、基壇解体後に経石をさらしておくのは、盜難や紛失の原因となる懸念があった。そのため全ての経石を取り上げることとした。

清掃、写真撮影、取り上げ、清掃…を繰り返し、平成19年1月26日、第16層目で全ての経石の取り上げを完了した。

#### 2 記録・取り上げ調査参加者

担当者 室伏徹、飯島泉、杉本悠樹(甲州市教育委員会生涯学習課文化財担当)

作業員 雨宮久美子、長山美代子、沢登淳子、土屋常子、戸田ひろ、深沢茂子

調査協力 設楽昌吾(藤造園建設株式会社)、岡敏郎(岡造園)

#### 3 調査の概要(第5図、第6図、第7図)

経石取り上げ調査により、本来の事業である武山勝頼の墓保存修理工事に大幅な遅れが生じることが予想されたが、できるだけ記録を残しながら取り上げ作業を行うこととした。当初は手作業による平面図を作成していたが、予想以上に時間がかかりすぎたため、すぐに写真に直接書き込む方法に切り替えた。また、平面の記録は図面又は写真で残したもの、水平の記録は基壇中央の長軸方向に1本エレベーションを作成しただけで、しかも中央基壇のエレベーションにかかる経石について、位置の記録だけで個別番号を記さなかったため、第1層から最大16層まで分けているが、各層がどの程度のレベルにあるのかが判別できない。大きな反省点である。

取り上げ作業は左右の基壇内の経石から始めたが、左右基壇の経石は、基壇内にそのまま入れ込まれた状況であった。その後、中央基壇の石塔を解体したところ、基壇内は砂が充填されているのが確認でき、少しずつ掘り下げていくと、基壇上段から25cmほどで経石が出土し始めた。経石の隙間に埋めるように砂を入れている状況もみえた。左右の基壇と中央基壇とでは、経石の埋納方法が異なることが判明し、右基壇内から出土した「戒名文字資料」の裏面に「安永九年」の銘があったことから、安永4年に造立された中央基壇と左右の基壇とは、外観は似ているが基壇の築き方から経石の埋納方法まで異なる

ることが判った。

短期間の調査であったが、全ての経石を記録しながら取り上げたのは大きな成果だった。番号を付けて取り上げた総点数は5,415点で、内訳は中央基壇4,843点、右基壇336点、左基壇236点を数える。各層の点数については表2のとおりである。

なお、取り上げた点数の中には、経石ではなく基壇の隙間に埋めたみかけ石の破片や、瓦片なども含まれていたため、実際の数は取り上げ点数と異なる。これについては後述する。

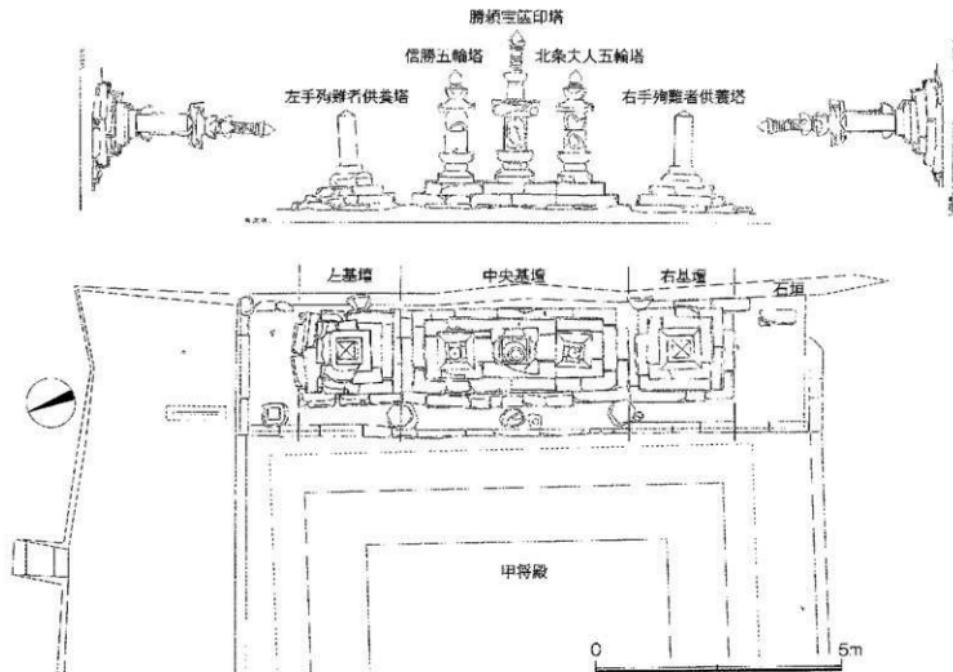


■写真11 経石取り上げ調査

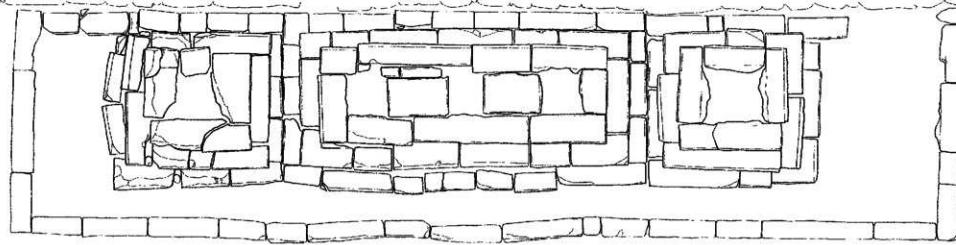
■表2 収り上げ経石数一覧

	1層目	2層目	3層目	4層目	5層目	6層目	7層目	8層目	9層目	10層目
勝側	44	56	69	70	109	106	208	172	140	188
北条夫人	39	49	69	82	96	185	122	50	41	30
信勝	74	82	90	92	101	240	362	289	233	226
中央基壇小計	157	187	228	244	306	531	692	511	414	444
左基壇	102	86	37	5	6					
右基壇	88	146	51	25	23					
左右基壇小計	190	232	91	30	29					

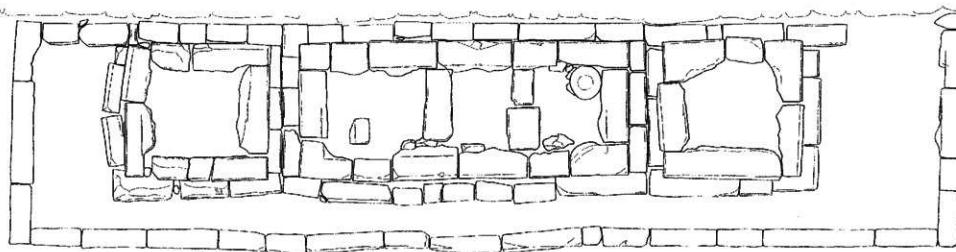
	11層目	12層目	13層目	14層目	15層目	基壇解体時(16層目)	その他	合計
勝側	50	105	53			106		1576
北条夫人	8	12						783
信勝	256	183	113	84	59			2,484
中央基壇小計	414	300	166	84	59	106		4,843
左基壇								236
右基壇								336
左右基壇小計								572
合計								5,415
平成18年1月26日の時点								



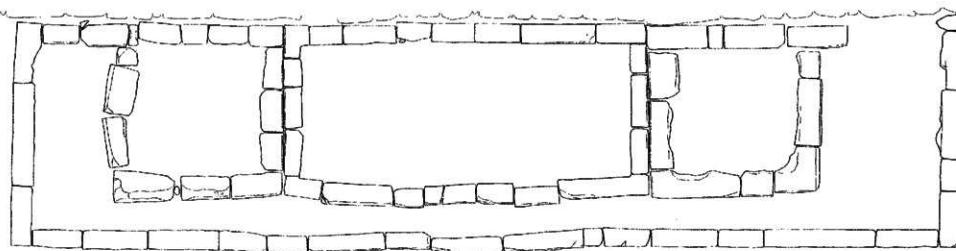
■第5図 武田勝頼の墓 修理前平面・立面図(1/100)



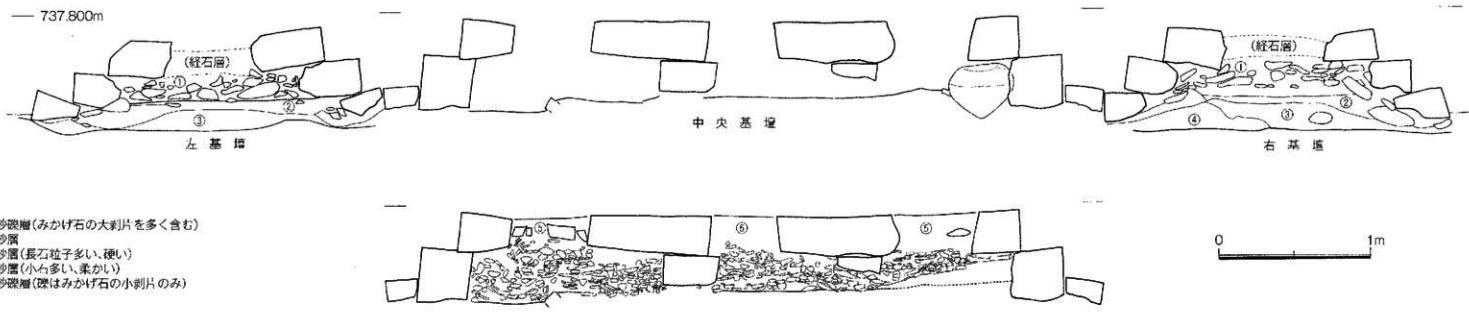
基壇上段石を解体した状況



基壇上段・中断石を解体した状況



■第6図 武田勝頼の墓 基壇平面図(1/50)



■第7図 基壇土層断面図及びエレベーション図(1/25)

## 第2節 平成19年度の調査

### 1 経緯と経過

19年度は出土した経石の処置が課題であったが、通常の市内遺跡発掘調査等事業の計画で予算計上していたため、すぐに整理作業にかかることができなかつた。そのため、県教育委員会では文化庁と協議し、経石整理作業を市内遺跡発掘調査等事業に組み込み、併せて武田勝頼の墓の総合調査として19年度から21年度までの継続事業とすることとなつた。このため19年度の市内遺跡発掘調査等事業の計画変更承認申請書を、平成20年1月15日付けで文化庁へ提出した。内容は、19年度の総事業費の増額と、21年度までの調査の継続である。

計画変更承認申請書に係る変更交付決定が平成20年2月12日に下りたため、当初予算の組み換えを行い、平成20年2月20日付けで財團法人山梨文化財研究所と業務委託契約を締結し、経石の整理業務に着手した。

台帳化の済んだ経石から教育委員会へ順次返し、市の直営として経石の注記及び接合・補修を行つた。経石への注記は取り上げたときに付けた記号番号をそのまま入れた。

また、平成20年度に勝頼の墓周辺の発掘調査を実施するに当たり、詳細な平面図が必要なため、平成20年2月21日付けで昭和測量株式会社岐東支店と業務委託契約を締結し、地形測量を行つた。

### 2 業務委託者、作業参加者

#### (1) 山梨県指定史跡「武田勝頼の墓」出土経石整理業務

契約日：平成20年2月20日

契約者：財團法人山梨文化財研究所 山梨県笛吹市石和町四日市場1566

委託代金額：2,301,600円（うち、消費税109,600円）

契約期間：平成20年2月21日から平成20年3月31日まで

#### (2) 武田勝頼公墓所地形測量業務

契約日：平成20年2月21日

契約者：昭和測量株式会社岐東支店 山梨県笛吹市石和町市部1030

委託代金額：525,000円（うち、消費税25,000円）

契約期間：平成20年2月22日から平成20年3月28日まで

#### (3) 作業参加者

担当者 室伏徹、飯島泉（甲州市教育委員会生涯学習課文化財担当）

作業員 雨宮久美子、長田美代子、栗原礼子、沢登淳子、手塚理恵、戸山ひろ、

萩原里江子、早川俊子、深沢茂子、正木なつ子

### 3 業務及び作業の概要

#### (1) 山梨県指定史跡「武田勝頼の墓」出土経石整理業務

平成18年度に取り上げた経石5,415点について、18年度中に右基壇出土の経石を先行して洗浄したところ、洗浄により墨書きが消えてしまうようなことはなく、表面風化が著しい石材以外は通常の作業が行えることが確認できた。

山梨文化財研究所と業務委託契約を締結後、経石を研究所へ運搬し、作業は研究所内で行われた。作業内容は、洗浄、写真撮影、法量及び重量計測と、それらを台帳に記入すること、また、写真は

最低表裏2面撮影し、墨書きが確認できる面は全て撮影すること、台帳には墨書きされた経文を解読し記入することとした。

洗浄、写真撮影、計測は順調に進んだが、経文解読には予想以上に時間が費やされた。中央基壇出土の経石は、取り上げ時から法華経が書かれていることが確認できたため、「法華経検索ソフト」を作成し、解読した文字列を入力すると該当部分が複数候補検索でき、前後の経文から判断し第何品のどの箇所に該当するかを特定し、台帳に記入していった。

業務完了後納品された台帳は、6cm厚のチューブファイル18冊分に及ぶ(写真12)。

#### (2) 武田勝頼公墓所地形測量業務

武田勝頼の墓は二百年遠忌で建立されたものであり、それ以前は甲将殿(御靈屋)をもって墓とみなしていたと思われる。つまり、墓標を指しビンポイントで「墓」と呼んでいた現在と異なり、かつては甲将殿一帯が「墓域」だったのだろう。そう考えると、武田勝頼の墓を理解するうえで、甲将殿周辺の発掘調査が必要不可欠となる。

発掘調査は翌20年度に計画したが、発掘の場所や方法を検討するため、地形図の測量を委託した。

範囲は甲将殿周辺とし、北・東・南側は道路まで、西側は境内の駐車場まで入れて、仕上がりは1/100である(第4図)。

#### (3) 経石注記・接合作業

台帳化が済んだ経石は隨時甲州市教育委員会へ持ち帰り、注記の作業を行った。

注記の作業と並行して、経石の接合をした。経石は埋納された場所によっては基壇石の圧を受けていたため、取り上げ時にバラバラになってしまったものや、折れ、亀裂が入ったものが多数みられた。それらの経石は、委託事業の中で接合が行われたが、注記のため経石を広げて観察してみると、別の地点から出土した経石同士が接合することが判った。

ヒビや亀裂が走っている経石は多量にあった。そのままだと、移動時の振動で割れる、あるいは剥離する懼れがあるので、亀裂の補修を行った(写真13)。補修方法は、木工用ボンドを同量程度の水で希釈し、面想筆で亀裂に流し込むこととした。同じ方法で、表面風化が著しい経石については全面に塗布した。

一連の作業は19年度中には完了せず、20年度まで続けた。

### 第3節 平成20年度の調査

#### 1 経緯と経過

平成19年度の経石整理について、委託事業は完了したものの市が直営で行った注記・接合・補修等の作業が完了せず、引き続き行うこととした。これらの作業は4月から6月まで行い、まだ接合する経石があるのだろうが一応のきりとした。また、委託事業の成果品である台帳についても、接合により内容を変更する必要性が生じたため、9月から台帳の追記と経文解読・照合を行った。



■写真12 経石整理台帳



■写真13 経石補修作業

勝頼の墓周辺の発掘調査については、19年度に作成した周辺の平面図をもとに発掘調査箇所を想定し、平成20年7月10日に開催した「武田勝頼の墓整備検討委員会」に詣り、方針等の検討をした。その結果、甲将殿を囲むようにトレチを設定し、遺構の有無の確認を行うこと、勝頼の墓の基壇下については遺構の確認もだが、基壇が不整を起こした原因を探るためにも調査が必要だということ、墓の背面の石垣で切られた高まりも、自然地形なのか人為的なものなのか調べる必要があること、などが挙げられ、調査の方針とした。

平成20年8月26日に発掘調査に着手した。18年度の経石取り上げ時に基壇中央長軸のエレベーションをとるために設置した基準杭とラインを再度基準とし、甲将殿の北面(左側面)・西面(正面)・中央部、及び基壇直下にトレチを設けた。背面の石垣については、甲将殿背面中央部と勝頼宝篋印塔中央部を石垣に投影し基準とした。調査の進行に伴い、トレチは随時追加した。

発掘調査期間中の9月10日と10月8日に整備検討委員会を開催し、調査の進行状況の確認と指導をいただいた。さらに、一通りの発掘を終えた11月1日には、景徳院総代会並びに地元大和町田野地区の住民の方々を対象とした現場説明会を開催し、約40名のご参加をいただいた。

その後11月5日に整備検討委員会に調査結果を報告し、完了とした。

その他、委託事業として経石の実測・トレースを行った。経石は、年号や人名が入っているものや経典の巻頭部分の写経がみられるものなど、特徴的なものを11点選別した。

業務は、財團法人山梨文化財研究所と平成21年3月2日に契約を締結し実施した。

## 2 業務委託者、作業参加者

### (1) 経石整理・台帳整理作業

- 担当者 室伏徹、飯島泉(甲州市教育委員会生涯学習課文化財担当)  
作業員 雨宮久美子、長田美代子、栗原礼子、沢登淳子、戸田ひろ、萩原里江子、  
深沢茂子、正木なつ子(以上、経石整理) 手塚理恵、早川俊子(以上、台帳整理)

### (2) 発掘調査

- 担当者 室伏徹、飯島泉(甲州市教育委員会生涯学習課文化財担当)  
作業員 雨宮久美子、長田美代子、栗原礼子、沢登淳子、戸田ひろ、萩原里江子、  
深沢茂子、正木なつ子  
岡敏郎、岡武、笠井良男(石垣解体)



7月10日



10月8日



11月5日

■写真14 整備検討委員会

(3) 武田勝頼の墓出土経石実測業務

契約日：平成21年3月2日

契約者：財団法人山梨文化財研究所 山梨県笛吹市石和町四日市場1566

委託代金額：420,000円（うち、消費税20,000円）

契約期間：平成21年3月2日から平成21年3月31日まで

### 3 調査の概要

経石を接合した結果、305点の経石が接合し、156点にまとまった（表3）。基壇ごとには、中央基壇が258点接合し135点に、右基壇が26点接合し12点に、左基壇が21点接合し9点になった。傾向として、同一の記号（K Y, II J, N Kなど）で接合することが多く、取り上げ層も同じ場合が多いが、中にはH JとN Kなど、離れた位置から出土した経石が接合する経石も135点中14点あり、これは基壇内に埋納する以前から割れていたためと考えられる。なお、左右の基壇については同一基壇内の接合のみで、左右を飛び越えての接合はなかった。

経文解説も大きな成果があった。中央基壇出土の経石について、3点から年代がみつかった。いずれも安永3年（1774）で、勝頼宝篋印塔の銘が安永4年であるので、石塔建立の前年に写経を始めたことが判った。うち1点には「十一世要導」の記述もあり、当時の住職であった要導も写経に関わっていたことがはっきりした。

発掘調査の概要については、第4章に記す。

## 第4節 平成21年度の事業

平成21年度は本報告書作成と、委託事業として20年度の発掘調査により出土した柱状木製品の保存処理及び実測業務を行った。

(1) 報告書作成従事者

作業員 沢登淳子、吉川美穂

(2) 柱状木製品保存処理及び実測業務

契約日：平成21年8月10日

契約者：財団法人山梨文化財研究所 山梨県笛吹市石和町四日市場1566

委託代金額：105,000円（うち、消費税5,000円）

契約期間：平成21年8月10日から平成22年3月31日まで

また、本事業とは別に山梨県緊急雇用創出事業臨時特例基金事業として、経石整理台帳のデータベース作成業務を委託して行なった。これは整理台帳が膨大なアナログデータであり、紙の資料として複製が困難であるため、PDFのデジタルデータに変換し、整理台帳の利活用を促すことを目的としている。調査中の写真など、他の資料とともに本報告書に付録として添付した。

表3 接合経石一覧

KY1-012	KY2-034	
KY1-023	KY2-032	
KY1-030	HJ1-025	
KY2-014	KY2-028	
KY3-020	KY5-027	
KY3-047	KY4-045	
KY3-067	KY4-039	
KY4-001	KY6-017	
KY4-062	KY5-015	
KY4-066	KY5-006	
KY5-019	KY5-025	
KY5-028	KY5-066	
KY5-044	KY10-016	
KY5-054	KY5-056	
KY5-062	HJ4-045	
KY5-097	NK2-068	NK3-020
KY7-042	KY7-044	
KY7-459	KY8-157	
KY8-002	KY8-003	
KY8-024	KY8-030	
KY8-065	NK16-033	
KY8-128	HJ10-026	
KY8-153	KY9-106	NK10-226
KY9-014	KY10-029	
NK9-022	NK10-161	
KY9-070	KY10-071	
KY9-075	KY10-053	
KY9-118	NK8-088	
KY10-033	KY12-031	
KY10-116	KY12-069	
KY10-121	NK9-025	
KY11-010	KY11-012	
KY11-078	HJ7-005	
KY11-081	KY11-086	
KY12-098	KY13-001	
KY13-022	KY12-023	KY12-025
KY13-027	NK12-153	
KY13-052	KY13-053	
KY13-048	KY13-050	

NK1-050	NK2-010	NK3-051	NK3-062
NK1-060	NK2-018		
NK3-005	NK4-062		
NK3-016	NK3-017		
NK3-021	NK3-022		
NK3-025	NK3-026		
NK3-039	NK4-025		
NK3-053	NK4-061		
NK3-055	NK5-066	NK5-069	
NK3-056	NK4-030		
NK4-016	NK5-005		
NK4-030	NK4-036		
NK4-035	NK4-081		
NK4-068	NK4-070	NK4-071	
NK4-076	NX5-067		
NK4-082	NK5-064		
NK4-083	NK5-091		
NK5-094	NK6-103		

NK11-165	NK11-254		
NK11-168	NK11-194	NK14-027	NK15-017
NK11-30	NK13-043		
NK11-220	NK11-221		
NK12-003	NK12-030		
NK12-033	NK12-167	NK13-020	NK14-080
NK12-091	NK13-041	NK14-057	
NK12-104	NK4-006		
NK12-141	NK14-011		
NK13-004	NK13-006		
NK13-075	NK14-017		
NK13-084	NK15-028		
NK14-009	NK14-044		
NK14-014	NK15-044		
NK15-009	NK15-014		
NK15-039	NK15-061		
NK16-008	NK16-009		
NK16-016	NK16-017		

HJ1-016	IJJ2-035	
HJ1-018	IJJ6-075	
IJJ2-019	HJ5-036	IJJ6-023
IJJ2-028	HJ2-034	
IJJ3-004	IJJ3-034	
IJJ3-016	HJ3-047	
IJJ4-024	HJ5-039	IJJ6-095
IJJ4-041	HJ4-041	
IJJ4-056	IJJ6-185	
IJJ4-063	HJ6-189	IJJ9-009
IJJ5-013	IJJ6-073	
IJJ5-035	IJJ6-022	
IJJ5-046	IJJ5-066	
IJJ5-093	HJ7-071	
IJJ6-006	HJ6-032	
IJJ6-015	HJ6-016	
IJJ6-090	NK4-020	NK4-022
IJJ6-123	HJ6-129	
IJJ10-003	NK8-036	
IJJ10-101	NK7-142	

NK10-144	NK13-048	
NK10-169	NK10-172	
NK11-028	NK11-030	
NK11-032	NK12-139	
NK11-059	NK12-082	
NK11-070	NK16-103	
NK11-080	NK14-071	
NK11-163	NK11-170	NK12-112

※同一箇所の複数は、居たものは取り上げ番号が早いものに含めている。  
 ※異なる箇所の複数は、KY、IJJ、HJ、NKAの順で早いものに含めている。  
 ※異なる箇所の複数は、太字で表記している。

## 第4章 発掘調査の概要

### 第1節 発掘調査の方法

18年度の経石取り上げ時のポイント(P1)から、エレベーション作成ラインの延長上15.5mの地点に新たなポイント(P2)を設け、P2から90度西へ振り8.0mの地点にポイント(P3)、18.0mの地点にポイント(P4)を、それぞれ設けた。以後、石垣以外のトレントはこれらのポイントを基準に設定した。

石垣については、全面を解体する必要はないものと判断し、甲将殿背面の中央と勝頼宝篋印塔の中心を結んだ線を石垣に投影し、基準点を設け、右手(南)に3.5m、左手(北)に3.0mの範囲について石垣を解体し、調査した。

調査は全て人力で行ったが、石垣解体のみユニック等の機械を使用した。なお、石垣解体に当たっては、後に復旧がしやすいよう事前に立面図を作成し、番付をしたうえで解体した。

### 第2節 各トレントの名称(第8図)

P1-P2ライン上に設定したトレントはE1とし、墓の縁石北側のトレントはE1Nとする。石垣のトレントはE2とし、東側へ深く掘り込んだトレントはE2N・E2Sとした。

以下、P3を基準に甲将殿中央に設定したトレントをC1~C3とし、P4を基準に甲将殿正面に設定したトレントをW1~W2とした。また、P2-P3ライン及びその延長上の、甲将殿前面に設定したトレントはN1~N3とした。

### 第3節 各トレントの状況

#### 1 Eトレント(第9図)

##### (1) E1トレント(第10図、第11図)

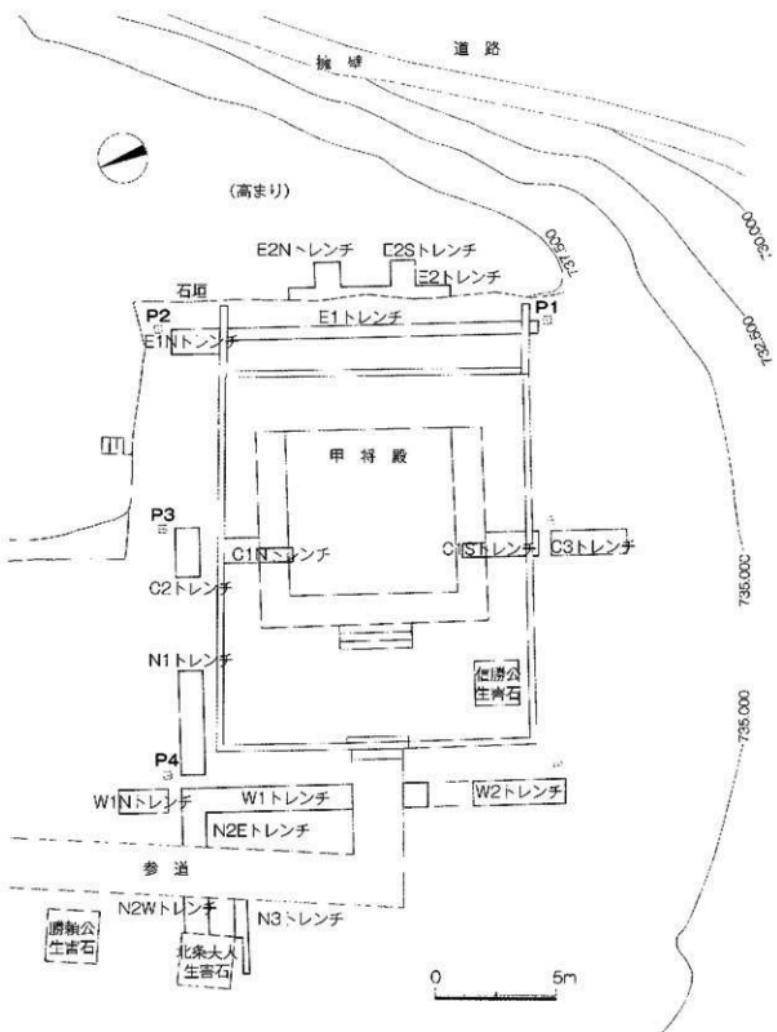
E1トレントは、墓の直下に入れたトレントで、他のトレントが幅1mで設定しているのに対し、50cmと狭くしている。

中央基壇については、平成18年度の経石取り上げにより、経石が置かれていた床に相当する面で止まっていたが、今回はその床面を掘り下げ土層の確認と遺構・遺物の検出に努めた。経石の床面は、石が混ざらない砂が敷かれていたが、5cmほどで、その下部にはみかけ石を細かく碎いた層(みかけ碎石層)、さらに砂層、碎石層と、砂層3枚、碎石層2枚の互層となっていた。その下には2cmほどの細砂層が一面に敷かれ、砂礫層へと続く。砂礫層は非常に厚く、人頭大ほどの石に阻まれながらも80cm程度掘り下がったが、掘りぬくことはできなかった。

左右の基壇の状況は、中央基壇のような砂と碎石の互層は見られず、比較的厚い砂の層としている。ただ、18年度の調査では砂層の上部には厚い碎石層を確認しているが、中央基壇のような丁寧さはない。

中央基壇と左右基壇の接する箇所については、基壇の圧による土層の乱れがあり、はっきりとした関係はつかめない。唯一、中央基壇の互層下部の薄い細砂層が左基壇まで続いている状況が確認できたが、右基壇には及んでいない。その下の砂礫層については共通している。

遺構と遺物について、墓の北側縁石近くで土壁1基が検出され、中から柱状木製品が直立した状態で出土した。柱状木製品は1辺12cmの角材で、60cmほど残存している。当初仮屋根又は石塔積み上げ用の施設と考えたが、縁石南側で同様な遺構は検出されていない。検出された位置から、遠忌の墓標と考えられる。



■第8図 発掘調査 トレンチ配置図(1/200)

(2) E 1 N トレンチ(第10図)

E 1 の延長上で、縁石の外に設けたトレンチである。地表から10cmほどは砂層だが、その下には砂礫層がレンズ状に堆積し、厚いところでは50cmほどある。さらに礫が混ざらない砂層が続き、1mほどで本来の地山と思われる層に到達する。

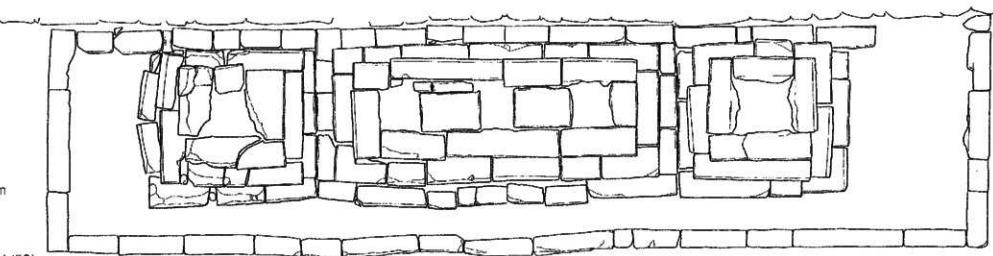
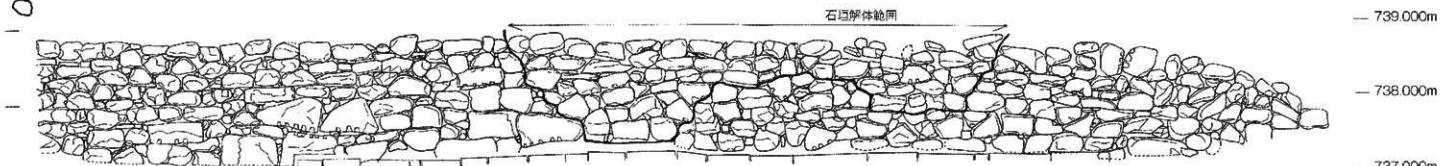
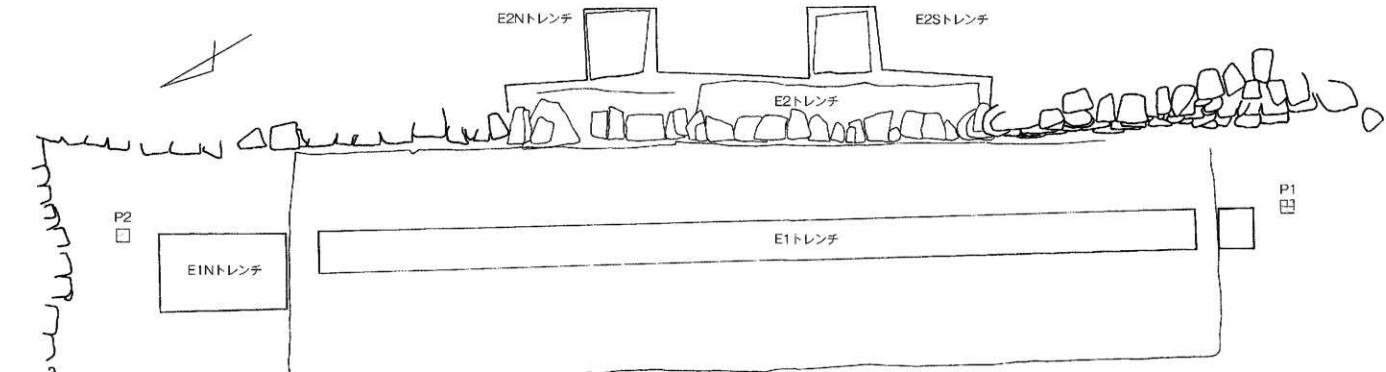
遺構・遺物は検出されない。

(3) E 2 トレンチ(第12図)

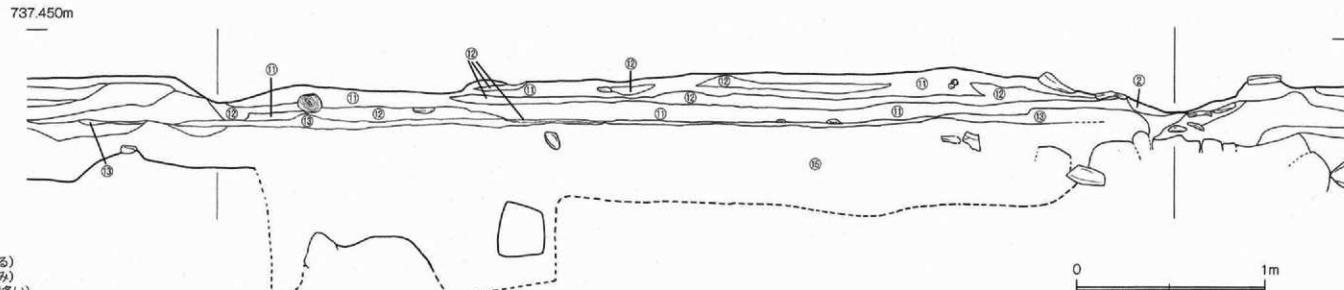
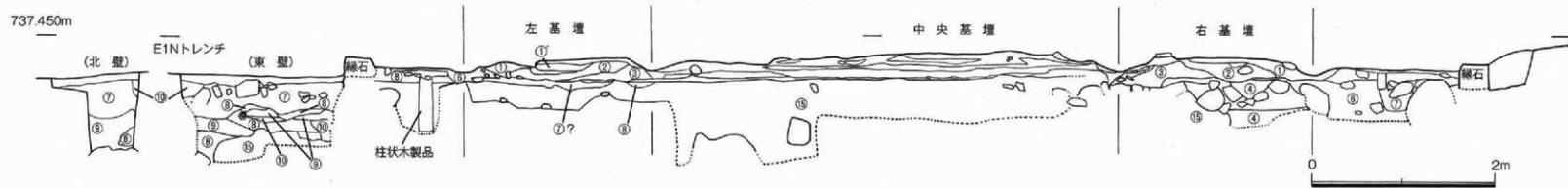
石垣を部分的に解体し、石垣の面から50cmほどで一旦土層を観察し、その後E 2 N・E 2 Sの2本のトレンチにより、複数方向の土層観察を試みた。

石垣に沿っては砂礫層が大きなレンズ状に堆積している状況で、この砂礫層が石垣の裏込めの役割を果たしていたようである。これが奥(東側)へ進むと、砂礫層は水平あるいはやや降下しながら続くが、その上部にはしまりのない褐色土が厚く積まれている。

遺構・遺物は検出されない。

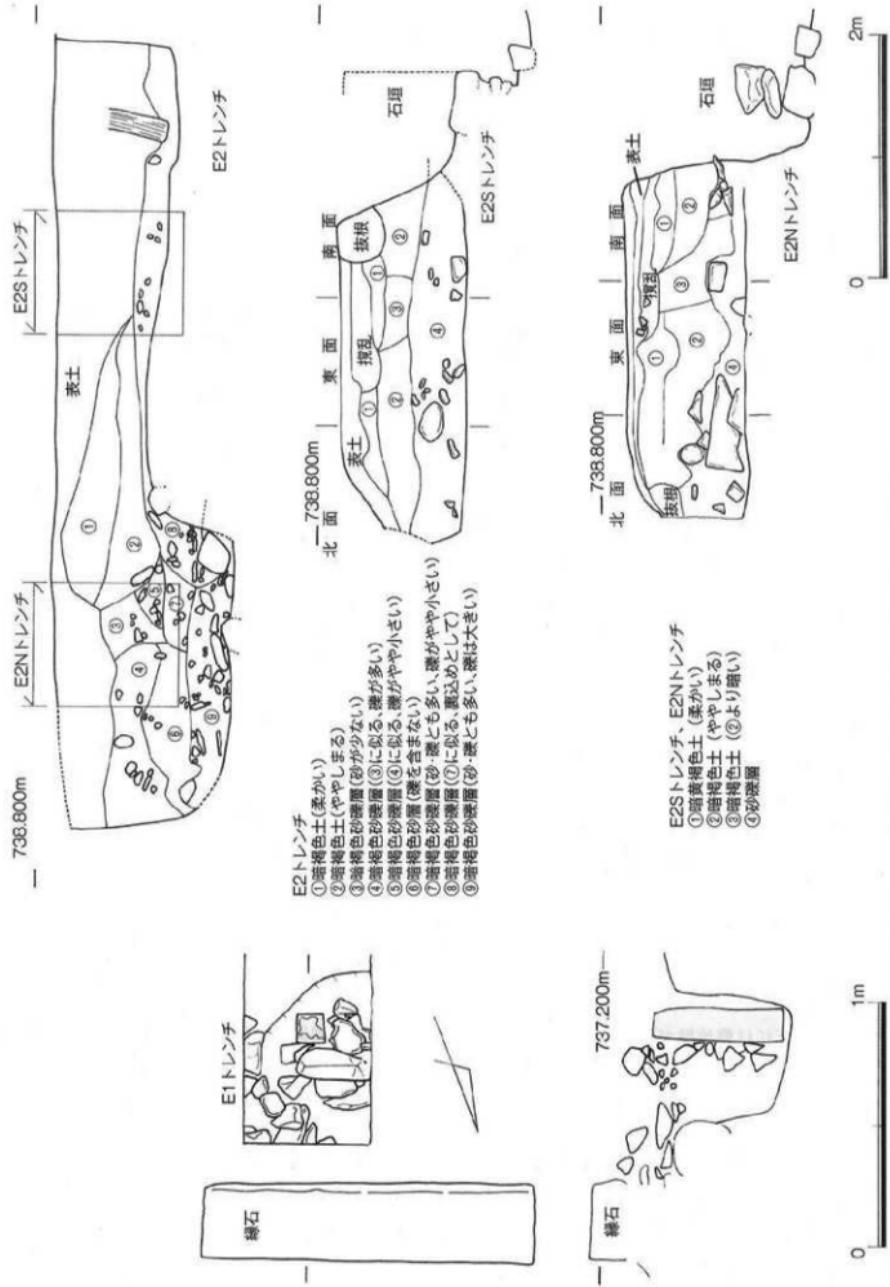


■第9図 石垣平面図及び立面図、Eトレンチ配座図(1/50)



- ①砂層(暗褐色)(赤味がかる)
- ②砂層(暗褐色)(赤味がかる)
- ③砂層(赤味がかる)(白粒多い)
- ④砂礫層(人為的なみかけ石の砂石入る)
- ⑤砂礫層(砂は数センチ程度の小礫のみ)
- ⑥砂礫層(砂は10数センチ程度の大礫多い)
- ⑦砂礫層(やや明るい)
- ⑧砂礫層(暗褐色)
- ⑨砂礫層(暗褐色)(赤味がかる)(⑩より明るい)
- ⑩細砂層(暗褐色)(赤味がかる)
- ⑪細砂層(⑩に似るが⑩より粗い)
- ⑫砂層(⑪に似る)
- ⑬みかけ石碎石層
- ⑭暗褐色粘質土
- ⑮小礫層(暗褐色)
- ⑯砂礫層(大きな礫、バク石多い)

■第10図 E1トレーニ 東壁及びE1Nトレーニ東壁・北壁土層断面図(1/40-1/20)



## 2 Wトレント

### (1) W 1 トレント(第13図)

地表面から30cmほど掘り下げるとき、礫が多く混入した褐色土が広がっていた。当初はこれが地山であると考え、それ以上掘り下げなかった。

遺構として、甲将殿参道近くに土壤が1基検出された。内部に堆積している上はしまりのない砂礫で、E1の土壤のような柱状木製品は出土しなかったが、同様に墓標を立てた箇所かと思われる。

### (2) W 1 N トレント(第14図)

W 1 トレントから北へ50cm離して設定したトレントで、W 1 トレントでは地下30cmを地山と考えたためそれ以上掘削しなかったのに対し、本トレントは地山ではなく整地層の可能性を考え、その確認と厚さ及び旧地表の状況を確認するために設定した。

地下30cmで礫混入層の上面に達し、その後半截し東側をひたすら掘り下げた。礫混入層は厚い砂礫層で、1mほど堆積していた。その下は礫を含まない砂層だが、これが旧地表に相当するものと思われるるので、この砂礫層は整地のための人為的な層だと判断される。

整地層からは、遺物は出土していない。

### (3) W 2 トレント(第14図)

W 1 トレントの南側に設定したトレントで、甲将殿が乗る台地平坦面の南際に当たる。

樹木が多く、表土はほとんどが腐葉土層で、20cmほどで地山と思われる層に至るが、根が縦横に張っており、詳細はつかめなかった。

W 1 トレントの南側(参道北側)までは砂礫の整地層が検出されているが、W 1 トレントの参道南側、及び本トレントでは整地層が検出されておらず、旧地形を残している場所と考えられる。

## 3 Nトレント

### (1) N 1 トレント(第15図、第16図)

甲将殿を巡る縁石の、北辺西側に並行して設定したトレントで、N 2 トレントから検出された石列の延長確認の目的もあった。

地表直下に石列が検出されたが、東へ行くほど列が乱れ、トレント北壁に接するあたりでは崩れた状況が確認された。

W トレントで検出された整地層は検出されていない。

### (2) N 2 E トレント(第15図、第16図)

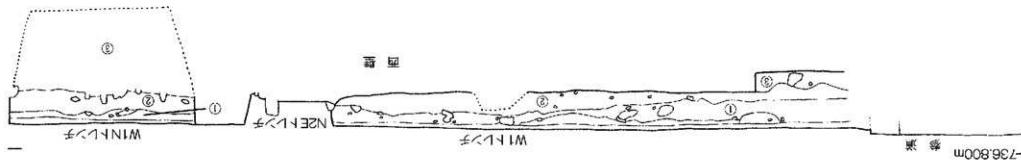
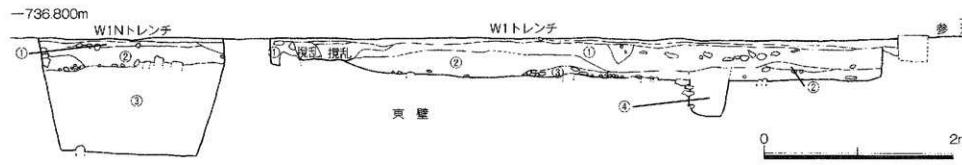
W 1 トレントの北端から西へ延ばしたトレントで、参道で切れる。地表直下から石列が検出されている。

石列の下には整地層があり、石列は整地後のものであるが、甲将殿などの遺物の縁石と考えるには貧弱なもので、東から西へ勾配をとっていることから、排水路的なものと思われる。

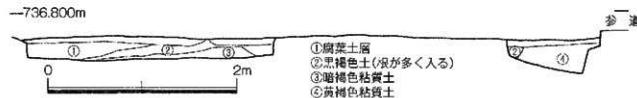
### (3) N 2 W トレント(第15図、第16図)

N 2 E トレントの延長で、参道西側から北条夫人生害石までの間に設定した。

石列の続きは検出されず、石列をなしていたと思われる石が表土に埋められているような状況であった。その表土はW トレントでみられたような30cm程度の厚さではなく、参道付近で45cm、北条夫人生害石付近では90cmと非常に厚い。その下には整地層の上面があるため、砂礫を使っての整地は、本トレントでは平坦を形成せず斜面にして収めていることが判った。

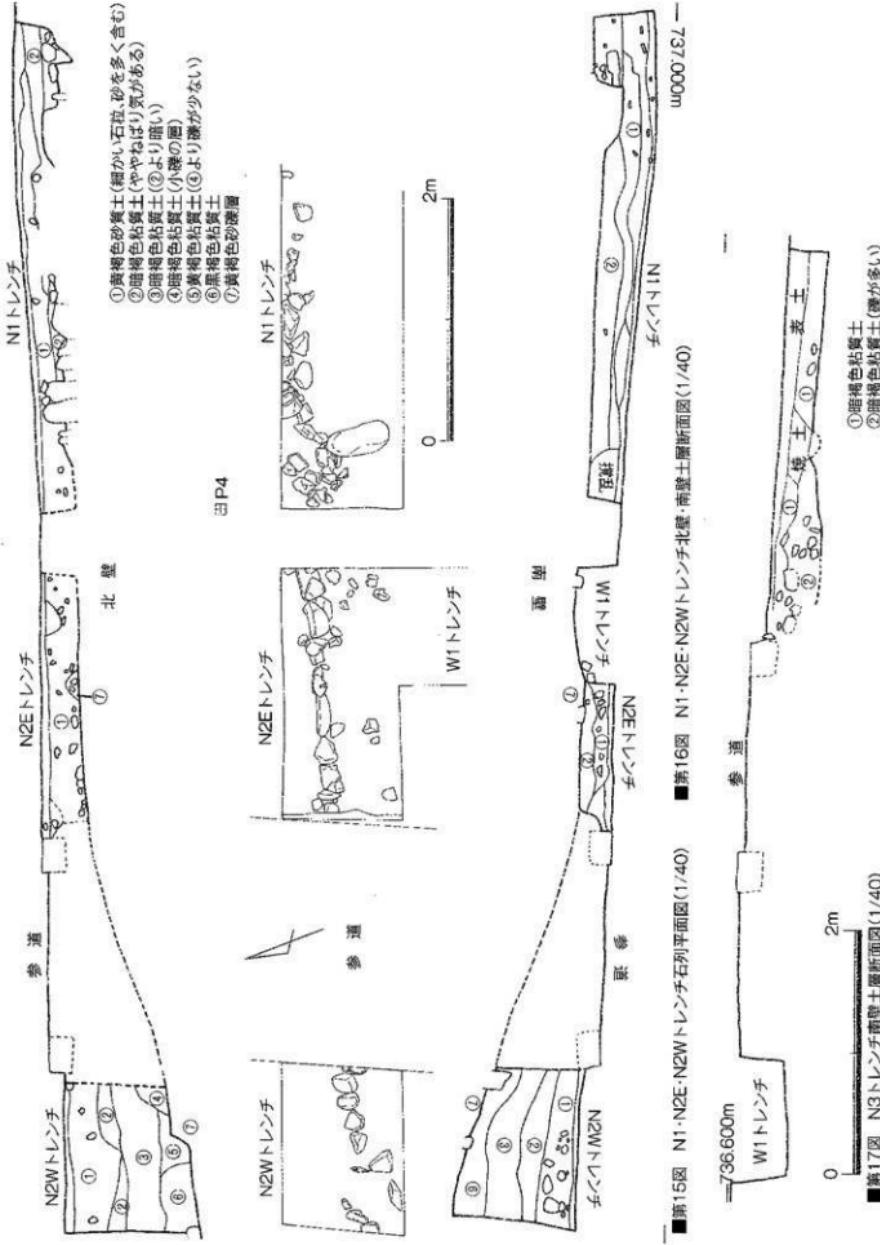
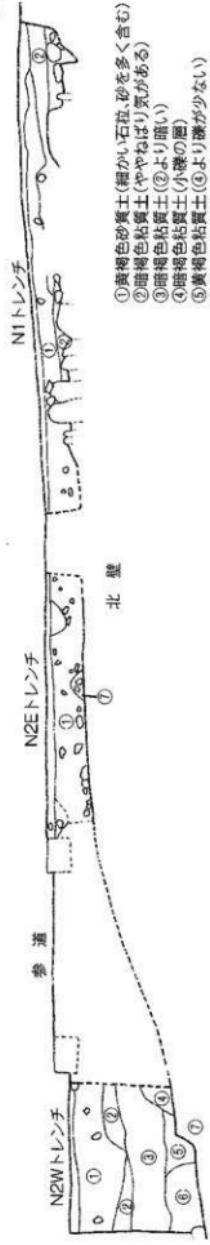


■第13図 W1-W1Nトレーニチ東壁・西壁土層断面図(1/40)



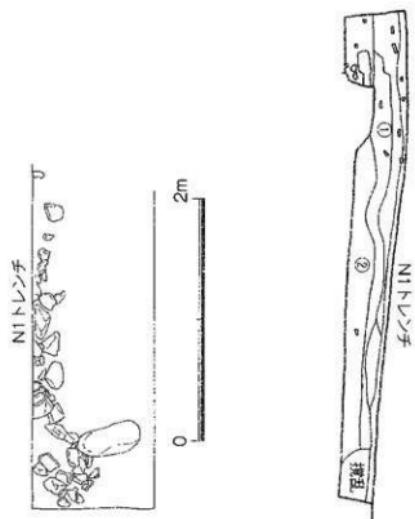
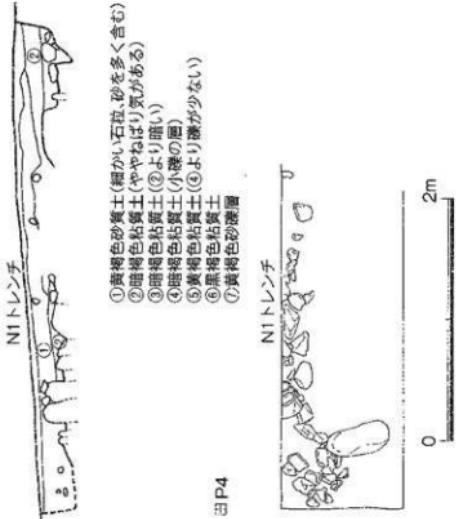
■第14図 W2トレーニチ西壁土層断面図(1/40)

—737.000m



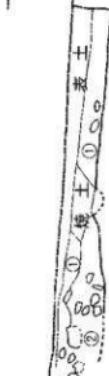
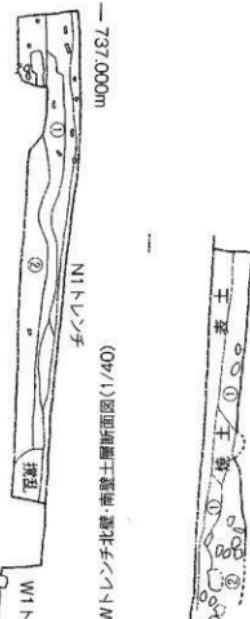
■第17図 N3トレンチ南壁土層断面図(1/40)

①強褐色粘質土  
②暗褐色粘質土(礫が多い)



—737.000m

■第18図 N1-N2E-N2Wトレンチ北壁・南壁土層断面図(1/40)



①強褐色粘質土  
②暗褐色粘質土(礫が多い)

そのため、砂礫により整地された平坦面は参道辺りまで、北条大人生害石が据えられている現在の平坦面は、その後の整地により拡幅されたものと思われる。

(4) N 3 レンチ(第17図)

N 2 W レンチから崩れた石列が検出されたことから、南側へ折れて繋がっていたことを想定し、南側へ幅50cmのレンチを設定した。

N 2 W レンチと同様、人頭大の石が多く埋まっていたが、石列を成していたかは不明である。

#### 4 C レンチ

(1) C 1 N レンチ(第19図)

甲将殿中心部の状況を探るため、甲将殿北側面から建物下部へ設定したレンチで、縁石から建物の縁までは幅1mで、建物下部は幅50cmで掘り進めた。

縁石近くからは明治27年の火災により落ちたとみられる瓦片が多量に出土し、杭を立てたような穴も検出された。建物下部は土層が細かく分かれ、亀腹と思われる石灰層も検出された。しかし総じて上は軟らかく、柱が林立する建物の下部ということで十分な調査はできなかった。

遺構・遺物は検出されていない。また、砂礫層も検出されず、本来の地形に近いものと思われる。

(2) C 1 S レンチ(第19図)

甲将殿南側面から建物下部へ設定したレンチである。状況はC 1 Nと同じである。

(3) C 2 レンチ(第18図)

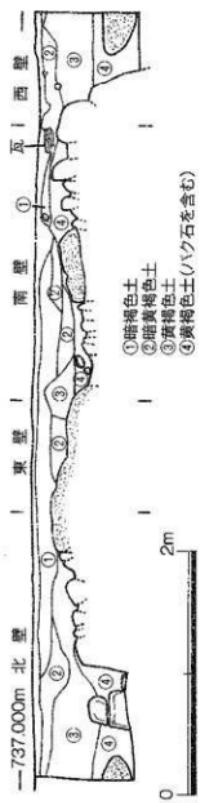
甲将殿北側面に沿って、縁石の外側に設定したレンチで、C 1 N レンチから整地層が検出されなかったことから、周辺の確認のため調査した。

東側半分にはみかけ石の風化したもの(バク石)が広がり、その上に人頭～拳人の石が散乱している状況で、バク石が及んでいない箇所は、地表から50cmで黄褐色の地山が検出された。

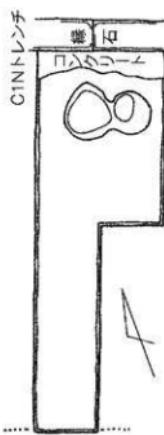
砂礫層が検出されず、巨大なバク石が広がっていることから、IH地形を良く残しているものと思われる。

(4) C 3 レンチ(第19図)

甲将殿南側面の南側、平坦面の南端に設定したレンチで、30cmほど掘り下げたが、W 2 レンチと同様に樹木の根が縦横に走っており、精査できなかった。



737.200m  
縄石  
①～⑦標記  
①暗褐色土  
②暗黄褐色土  
③斑褐色土  
④黄褐色土(ハク石を含む)  
⑤暗褐色粘質土(しまりあり)  
⑥暗褐色粘質土(白粒を含む、しまりなし)  
⑦明褐色土(しまりあり)



①～②塊乱  
③暗褐色粘質土  
④暗褐色粘質土(③より暗い)  
⑤暗褐色粘質土(③より明るい)  
⑥黄褐色粘質土(⑦が混じる)  
⑦黄褐色粘質土(地山)

■第19図 C1Nトレンチ平面図及び西壁土層断面図、  
C1S・C3トレンチ西壁土層断面図(1/40)

## 第4節 発掘調査の成果

### 1 砂礫層の検出

武山勝頼の墓及び甲将殿は、700mほどどの比較的広い平坦面にあり、背後に比高差2mほどどの高まり地形がある。墓はこの高まりをL字に切って石垣を積み、スペースとしていることから、この高まりは自然地形ではなく、「塚」だったのではないかと考えられた。石垣背面の調査により、地表から70cmほど以下は砂礫層が厚くみられ、それが河川由来の砂礫と考えられることから、塚と呼んでよいかどうかは別として、人為的に積み上げた高まりであると思われる。

その砂礫層であるが、CトレンチとW2トレンチを除いて広く検出されている(第20図)。基壇下部では掘り下げてみたが底が確認できず、W1Nトレンチでは1mの厚さを確認した。また、N2Wトレンチでは、砂礫層の上面は西側へ傾斜し落ちている状況が確認できる。

Cトレンチ、W2トレンチで砂礫層は検出されず、黄褐色の地山が確認できることから、この砂礫層は整地層と考えている。また、整地層からは一切遺物は出土しなかったことと、含まれる礫石の種類や大きさが似ていることから、景徳院の東から南へ曲るように流れている小河川(雨沢)から運び上げたものだろう。

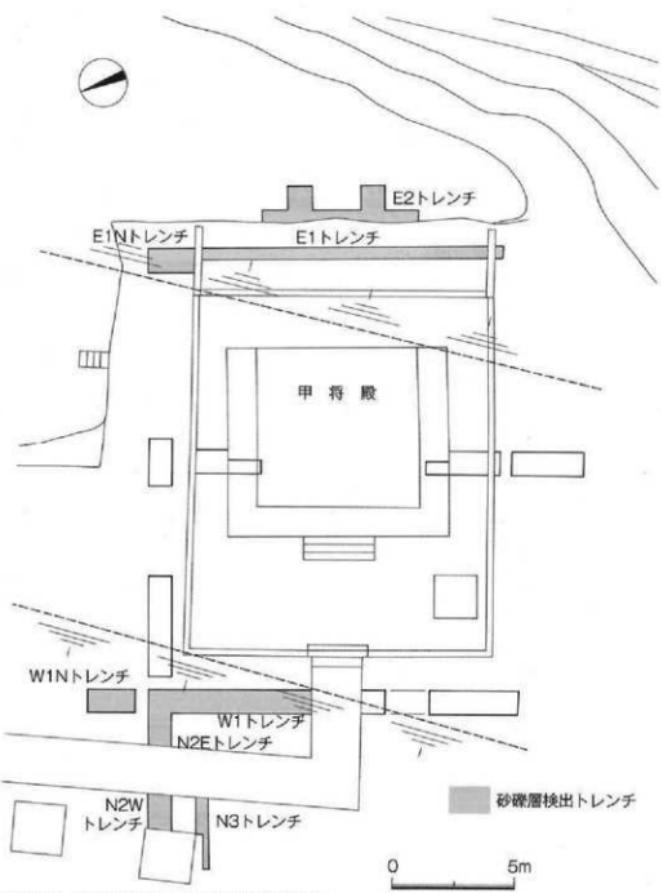
この砂礫により、本来は尾根状の地形だと考えられる甲将殿周辺を、現状のような広い平坦面へと変えていったと思われる。その時期については、天正10年の田野寺建立時か安永4年の勝頼の墓建立時を当てることができる。出土品が全くないため推測でしかないが、二百年違忌のような大事業に併せて行わなければ、このような人造成は為し得ないのでないだろうか。

### 2 基壇の状況

平成18年度の経石取り上げ時に、右基壇から出土した「戒名文字資料」(R1-001)の裏面に「安永九年」の銘が入っていたことから、勝頼・北条夫人・信勝の供養塔が据えられる中央基壇と、殉難者供養塔が据えられる左右の基壇は、異なる時期に造られた可能性があることが判り、基壇解体時の観察でも、基壇の組み方に違いがあることが判明した。一見同じように上段・中段・下段の3段からなるが、中央基壇は中段石が地面に据えられ、経石埋納のための石室を形成していた。上段石は中段の上に据え、下段石は中段に添えているだけであった。いっぽう左右の基壇であるが、下段石の上に中段石を乗せ、さらにその上に上段石を乗せるという構造で、断面図をみるとその違いは明らかである。

そのため、まず安永4年に中段基壇を、5年後の安永9年に左右の基壇を築いたと考えた。

しかし、E1トレンチの土層観察では、中央基壇直下と左基壇直下に連続する薄い層がみえ(第10図土層説明⑩)、また、版築状の互層は中央基壇のみであるが、互層中の砂層と同じ砂質の層が左右基壇にもある。この状況は、全く別々に基壇を造ったというよりも、ある程度連続して、あるいは一連の工事として、3基の基壇を造ったと思われるものである。



■第20図 砂疊層検出トレンチ分布図(1/200)

### 3 中央基壇の版築状互層(写真15)

版築状互層は左右の基壇にはみられない、中央基壇特有の仕様である。

経石を埋納するための中段石による石室の床を掘り下げたところ検出され、構造は、床面から5cmの砂層、5cmのみかけ石の碎石層、4cmの砂層、6cmの碎石層、8cmの砂層、の5層で、砂はやや赤みを帯び粒子がそろった砂、碎石はみかけ石を細かく砕いているが、砕ききっていないものも含まれる。この5層がそれぞれ同じ厚さで見事な水平層を成している。

互層は、中段石・下段石の下部には至っていないため、基壇の強化を図ったものではないと考えられる。供養のための経石を埋納するにあたり、最大限の敬意を払い版築状の丁寧な化粧床としたものだろう。



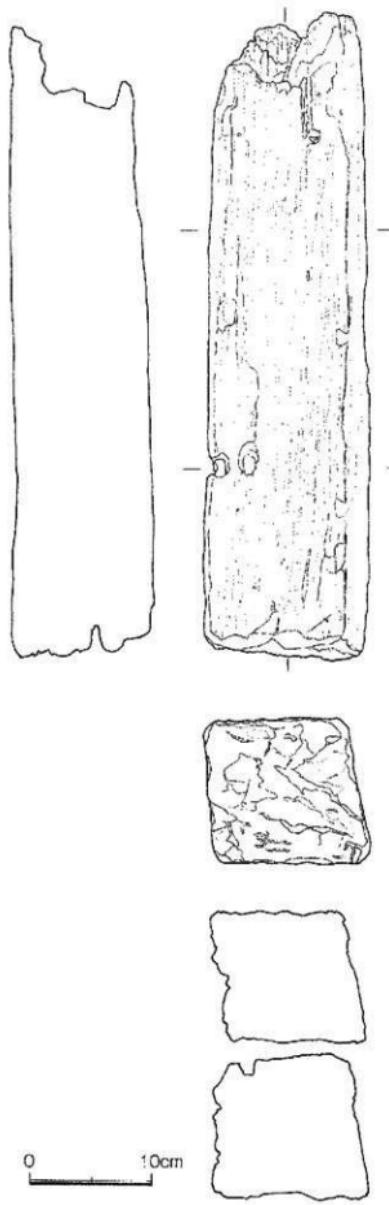
■写真15 版築状互層

### 4 柱状木製品と土壙について(第21図)

E 1 トレンチの北側、左基壇と縁石の間から、柱状木製品が出土した。1辺約12cmの角材で、底から60cmほどの長さで残されていた。

先述の通り基壇の周辺も砂礫層が厚くあり、整地時に据えられた柱ではないと思われるため、二百年遠忌以後に据えられたものであろう。木製品の形状と据えられた位置から、遠忌法要時の墓標とみるのが適当と考える。

また、W 1 トレンチの南側から土壙が1基検出されている。こちらには出土品はなく、覆土は掘り込まれた砂礫層と同様に砂礫だが、非常に緩くしまりがない。甲将殿のほぼ正面に当たる位置なので、これも法要の墓標を据えたものと思われる。



■第21回 柱状木製品実測図(1/4)

## 第5章 考察

### 第1節 経石整理及び調査の成果から

平成19年度に業務委託事業として始めた経石整理だが、結局平成20年度まで直営事業として残り、経文解説や経石接合も20年度末でひとまず完了とした。しかし、作業員の熱意により経石同士の接合や経文の特定もかなり進み、一定の特徴や傾向がつかめるほどの資料を得ることができた。

経石から二百年遅忌の様子を探ってみたい。

#### 1 経石数の確定

第3章第1節に記したとおり、18年度の経石取り上げ時には5,415点に記号を付け取り上げたが、19年度・20年度の整理作業により点数が変わっている。その理由は、経石と思って取り上げたものの中に基壇の隙間に入れ込んだようなみかけ石の破片が入っていたため除去したこと、経石同士の接合が進んだ結果点数が減少したこと、などによる。

整理作業により確定した点数は5,275点で、内訳は中央基壇4,710点(勝頼KY 1,451点、北条夫人HJ 761点、信勝NK 2,498点)、右基壇321点、左基壇224点、その他として番号を付けずに取り上げたもの20点である(表4)。

■表4 経石出土点数

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
中央基壇										
勝頼(KY)	44	53	70	69	104	104	209	169	139	187
北条夫人(HJ)	37	49	69	80	93	175	119	50	40	29
信勝(NK)	74	80	85	82	97	233	355	279	227	219
小計	155	182	224	231	294	512	683	498	406	435
右基壇(R)										
信勝(NK)	89	138	51	22	21					
左基壇(L)	96	82	35	5	6					
小計	185	220	86	27	27	0	0	0	0	0
その他										
合計	310	402	310	258	321	512	683	498	406	435

	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	合計
中央基壇													
勝頼(KY)	48	105	50										1,451
北条夫人(HJ)	8	12											761
信勝(NK)	250	178	106	76	55	102							2,498
小計	406	295	156	76	55	102							4,710
右基壇(R)													
左基壇(L)													
小計	0	0	0	0	0	0							321
その他													224
合計	406	295	156	76	55	102							545

## 2 経石の石材について

経石の整理により作成した台帳に石材の項を設けなかったため、石材の種類数やその割合を出すことは困難であるが、概略的には、中央基壇出土の経石は黒色の粘板岩が多くみられ、左右基壇出土の経石は、地元で「鉄平石」と呼んでいる板状の石が多い。この鉄平石は景德院背面を流れる雨沢に産出し、近年まで石材として盛んに出荷されていた。鉄平石は平らな面を多く有するため、経石に向いた石であるが、左右基壇出土経石はこの特性を十分活かしているのに対し、中央基壇出土経石に占める鉄平石の割合はそう多くない。また、墓や基壇にも使われているみかけ石は、景德院が所在する大和町をはじめ甲州市域で広く採取でき、産業にもなるほど豊富であるが、経石としてはわずかに使われているだけである。粘板岩と比べて撥水性が高いため、墨をはじいてしまうからだと考えられる。

経石の石はどこから入手したのだろうか。20年度の発掘調査でW1 Nトレンチを深く掘り下げた際掘り上げた砂疊層の礫が、大きさ、種類とも中央基壇出土経石の石材に共通していると感じた。身近に石材が得られる場所として近くの雨沢は最適地であるが、沢へ集めに行つたのではなく、造成のため運ばれてきた砂疊の中から集めたものかも知れない。

左右基壇出土の経石の石材は大振りの鉄平石が多い。鉄平石は寺から最も近い沢でも拾えるが、岩脈はさらに上流に露頭がみられ、その周辺では大振りな石を採取しやすい。そこまで足を運んで求めたかは判らないが、戒名文字資料R1-001がそうであるように、鉄平石を選んでいることは間違いないだろう。

## 3 経石に写経された經典

墨書きは水につけると文字がよくみえるので、水につけながら一字一字判読する作業を行った。その中で、一字以上読めるが出典の判らないものは「出典不明」、文字痕は認められるが一字も読めないものは「判読不能」とした。整理作業における照合により、中央基壇で899点、右基壇で81点、左基壇で54点、計1,034点の経石について、その出典及び内容がほぼ明らかとなった。

### (1) 中央基壇出土経石

中央基壇出土経石は、899点中892点が法華經からの出典とみられ、残り7点のうち3点は金剛般若波羅蜜經と思われ、3点は年号のあるもの、1点は出典不明だが「銀五郎」と読める。

解説できた部分を、7万字弱から成る法華經に当てはめてみると、解説経石の率が20%程度であるのに対し、20%に相当する1万4千字よりも少ない。8割ほどが解説不能な経石であるため一概にはいえないが、写経の際經典の全てを写していないものと思われる。

特筆すべき経石として、年号が入っているものが3点見つかっている。「K Y 4 - 0 4 3」「K Y 4 - 0 6 2」「K Y 1 0 - 0 0 9」がそうで、いずれも「安永三年」とあり、翌年に中央基壇の供養塔が建立されているので、前年から写経を始めたことが判る。この3点に共通するのは「K Y 4 - 0 4 3」の「大乗妙典經」、「K Y 4 - 0 6 2」の「妙法蓮華經卷」、「K Y 1 0 - 0 0 9」の「妙法蓮華經卷」である。



■写真16 W1 Nトレンチから掘り出された礫



■写真17 雨沢上流部の鉄平石露頭

華経五百弟子受記品第八」のように、法華經の品題が書かれていることである。また、「KY 4-043」には「神保」、「KY 10-009」には「十一世要導」と、写経した人物名が記されていることから、「KY 4-062」にも人物名が記されていたかも知れない。法華經には28の品(章)があり、解説できなかった経石の中にはこのような情報を有するものも他にあったと考えられる。

## (2) 左右基壇出土経石

左右基壇出土経石は、複数の經典が写経されている。「戒名文字資料」(R 1-001)の回向文に「上來諷誦金剛般若波羅蜜經首楞嚴神呪大悲神呪開甘露門消災陀羅尼集所功德...」とあり、ここに記されている金剛般若波羅蜜經、首楞嚴神呪(大仏頂万行首楞嚴神呪)、大悲神呪(大悲円満無礙神呪)、開甘露門、消災陀羅尼(消災妙吉祥神呪)がそうである。ただ解説を進めてみると、消災陀羅尼とあるが実際には「宝蔵印陀羅尼(一切如來心秘密全身舍利宝蔵印陀羅尼經)」で、解説できた点数も宝蔵印陀羅尼が最も多い。各經典の確認点数は、金剛般若波羅蜜經20点、首楞嚴神呪(大仏頂万行首楞嚴神呪)13点、大悲神呪(大悲円満無碍神呪)2点、開甘露門6点、消災陀羅尼(消災妙吉祥神呪)0点、宝蔵印陀羅尼(一切如來心秘密全身舍利宝蔵印陀羅尼經)93点である。

宝蔵印陀羅尼は、右基壇に入れるものと左基壇に入れるものと、重複して写経・埋納していることが判った。これは他の經典では行われないもので、何か特別な理由があったものと思われる。経石の判読に関わった早川俊了氏は、勝頼の幕である宝蔵印塔に起因するのではないかと考えている。

また、法華經と思われる経石は出土していない。写経者は安永4年に埋納した経石が法華經を写経していることを知り、あえて別の經典を写経したものと考えられる。

## (3) 特記経石

中央基壇出土では年号や人名が入っているもの、左右基壇出土では經典の巻頭部分が写経されているものなどを、特記経石として11点選び、財團法人山梨文化財研究所へ委託し実測業務を行った。

■表5 特記経石一覧

記号	記載内容	法典				参考
		幅 (mm)	横 (mm)	厚 (mm)	重量 (g)	
1 KY4-043	「人乘妙法經」「神保」「安永三甲午年八月吉日」	175	44	41	773	「神保」は人物(勝保)名か
2 KY4-062	「妙法蓮華經卷」「安永三」	118	92	18	415	
3 KY7-143	「勝頼釋行」	84	60	21	127	金剛般若波羅蜜經の差額か?
4 KY10-009	「妙法蓮華經五百」「弟子受記品卷」「安永三甲午年」「八月吉日」「十一世要導」	151	85	24	608	妙法蓮華經五百弟子受記品第八
5 R1-001	「越山勝公大居士...」「安永九年」「大雄」	225	220	28	2820	戒名文字資料
6 X5-001		96	92	36	538	奥羽勝大師吼金剛經?
7 L1-087	「金剛般若波羅蜜經卷第十八」	90	67	23	200	金剛般若波羅蜜經卷第十八
8 L2-001		260	160	38	2690	御廿藏院(卷頭部分)
9 L2-046		132	151	25	712	大悲呪
10 L2-049		150	127	45	1100	大悲呪(卷頭部分)
11 L2-086		245	152	58	3040	宝蔵印陀羅尼經(卷頭部分)

①KY4-043(第22図)

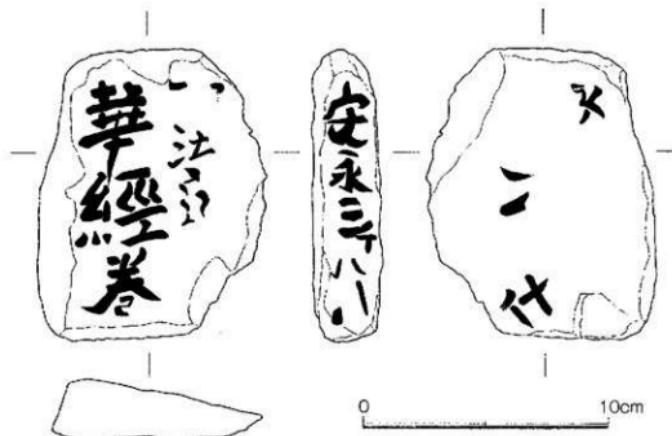
長さ18.8cm、幅5.9cm、厚さ4.2cmを測る。バチ形を呈する一面に「大乘妙典經」禪保」、その裏面には縦書きに不鮮明な文字があるが判読できず、その下部に横書きに「禪保」とみえる。「禪保」は人物名とみられる。側面はほぼ長方形で一面に「安永三甲午年八月(吉)日」、その裏面の下部は「經卷」と読み、品名が書かれていたのかも知れない。



■第22図 KY4-043 (1/2)

②KY4-062(第23図)

長さ12.0cm、幅9.4cm、厚さ2.8cmを測る。一面に「妙法蓮華經卷」と書かれるが、「妙法蓮」は細く不鮮明であるに対し「經卷」は太くはっきり書かれている。「卷」が品の題字の一部とすると、「卷」で始まる品名はない。法華經は28品から成るが、それを8卷に分けているので、その「卷」を記したものと思われる。裏面は不鮮明で判読できない。「安永三」の年号は側面に書かれている。その続きに、不鮮明ながら「八」とあるので、「八月吉日」とあったのだろう。



■第23図 KY4-062 (1/2)

③KY7-143 (第24図)

長さ7.9cm、幅6.9cm、厚さ2.0cmを測る。一面に非常に細い文字で「鳩摩羅什」と書かれている。「鳩摩羅什」は西暦344年生まれ、413年没(一説には350年から409年)。中国の南北朝時代初期に仏教経典を訳した僧法華経の翻訳者として知られる。「羅什」とも略称される。

前後に記されている文言から、法華経よりは金剛般若波羅蜜經の巻頭

に近い。また、この経石は「鳩摩羅什」のように極めて細く書かれた文字と、側面にある「千二百」のように太い文字と2種類が混在する。写経者が異なるとすれば、一石に複数の人物が写経した珍しい例である。

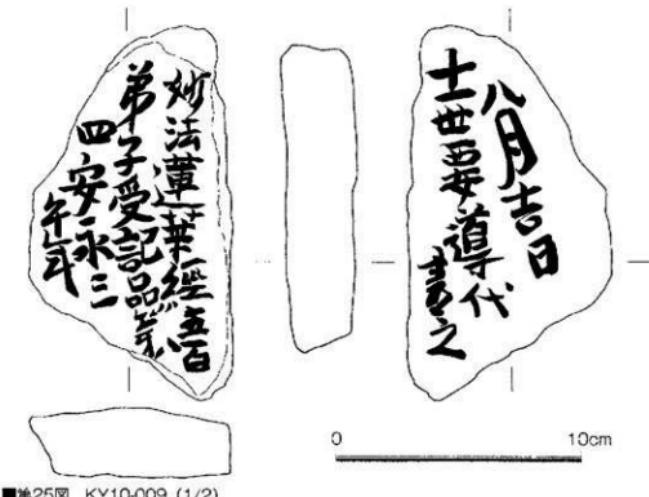
④KY10-009 (第25図)

長さ15.7cm、幅8.6cm、厚さ3.0cmを測る。一面に「妙法蓮華經五百弟子受記品第八」「安永三年」、その裏面に「八月吉日」「十一世要導代書之」と記される。法華經の品名、年号、写経者名がはっきり記されているうえ、写経者である要導は當時二百年遠忌を執り行つた景德院住職である。

品名が記された経石には、同様に人物名や年号が一緒に記されているものと考えられるが、確認できた点数は極めて少ない。それゆえ貴重な経石なのだが、「要導之を書く」ではなく「要導の代に之を書く」とあるので、何か特別な、例えば五百弟子受記から写経を始めたとか、そういう意味合いが感じられる。



■第24図 KY7-143 (1/2)



■第25図 KY10-009 (1/2)

##### ⑤R 1-001 「景德院殿頼山勝公大居士」(第26図)

長さ23.3cm、幅22.0cm、厚さ3.8cmを測る。右基壇の経石層の上面中心付近に正位で置かれており、表面には同じ大きさで整然と勝頼・北条大人・信勝の戒名が記され、裏面には年号「安永九子年七月」と、人名「奉天瑞書者」が書かれている。経石というよりも第一級の資料であり、「戒名文字資料」と呼んでいる。この出土により、左右の殉難者供養塔の建立年が勝頼らの供養塔の建立後だという可能性を考慮することとなった。

一般的に経石に供される石は大きさも形状も様々で、石材を選択するという意図はあまり感じられない。しかしこの資料に関しては、縦横の長さがほぼ等しく、左右対称の五角形を呈し、表裏面も平らで厚さも一定であり、慎重なほど石材を選んだものであろう。

###### 表面

「仰翼三宝俯垂照鑒」  
 「上米諷誦金剛般若波羅蜜經」  
 「首楞嚴神呪大悲神呪黃闡廿露門」  
 「消災陀羅尼所集功德者為」

「景德院殿頼山勝公大居士法雲院甲嚴勝信大居士」

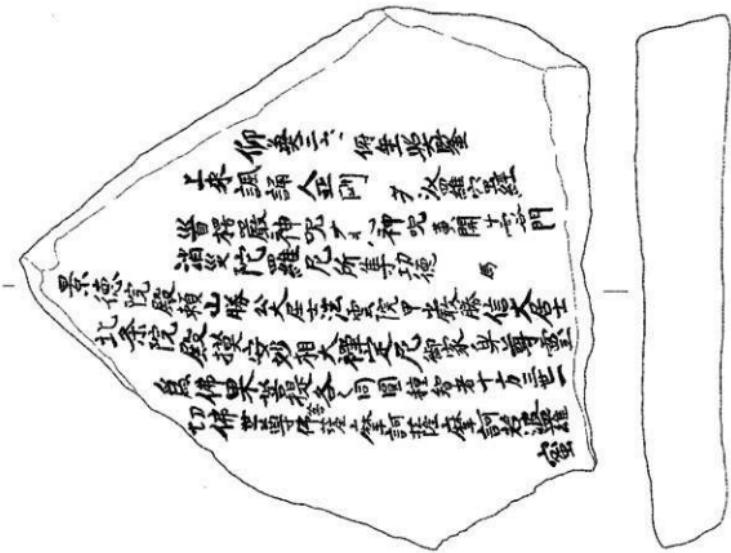
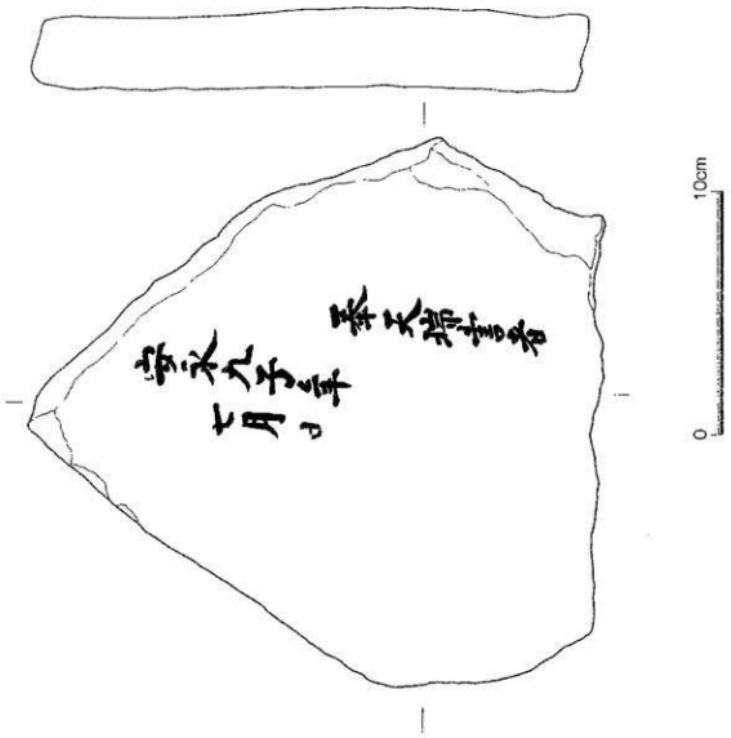
「北条院殿模安妙相大禪定尼御家身尊靈」

「為佛果菩提各々同圓種智者十方三世一」

「切佛世尊佛菩薩摩訶薩摩訶若波羅蜜」

###### 裏面

「奉天瑞書者」  
 「安永九子年」  
 「七月日」



■第26圖 R1-001 (1/2)

⑥R 3-004(第27図)

長さ11.9cm、幅9.2cm、厚さ3.7cmを測る。金剛般若波羅蜜経であるが、その中でも「梁朝傳大師頌金剛經」に文言が似ている。

⑦L 1-087 「金剛般若波羅蜜経分第十八」(第28図)

長さ9.0cm、幅7.1cm、厚さ2.5cmを測る。金剛般若波羅蜜経を示す「一體同觀分第十八」と一面正面に大書してある。

⑧L 2-001(第29図)

長さ26.5cm、幅16.3cm、厚さ5.0cmを測る。「閻山霧門」の巻頭部分の写経である。非常に大きい石を用いており、このように大きい石に写経するのも、左右基壇出土経石の特徴といえる。書者は幅の広い筆を用い、かなり大きい文字で写経している。また、かすれたような文字も散見されることから、毛が磨耗した筆を使っているものと思われる。

⑨L 2-045(第30図)

長さ13.9cm、幅14.8cm、厚さ3.1cmを測る。三角形を呈する石に「首楞嚴神呪」の一節が写経される。文字は同じ大きさで整然と書かれており、文字資料R 1-001の書者に似る。

⑩L 2-049(第31図)

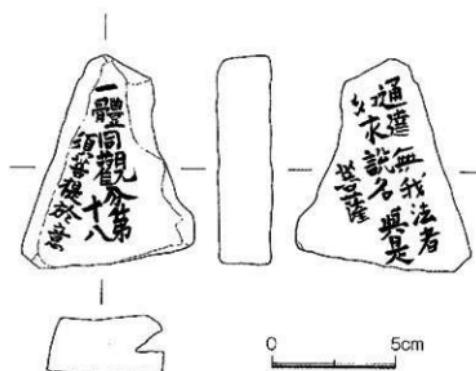
長さ13.0cm、幅15.0cm、厚さ4.0cmを測る。「大悲神呪」の巻頭部分の写経である。先のL 2-045の書者に似る筆跡である。一面を書いた後裏面は90度左に回して書いている。また、一つの側面には複数回に分けて写経しており、特徴的である。

⑪L 2-086(第32図)

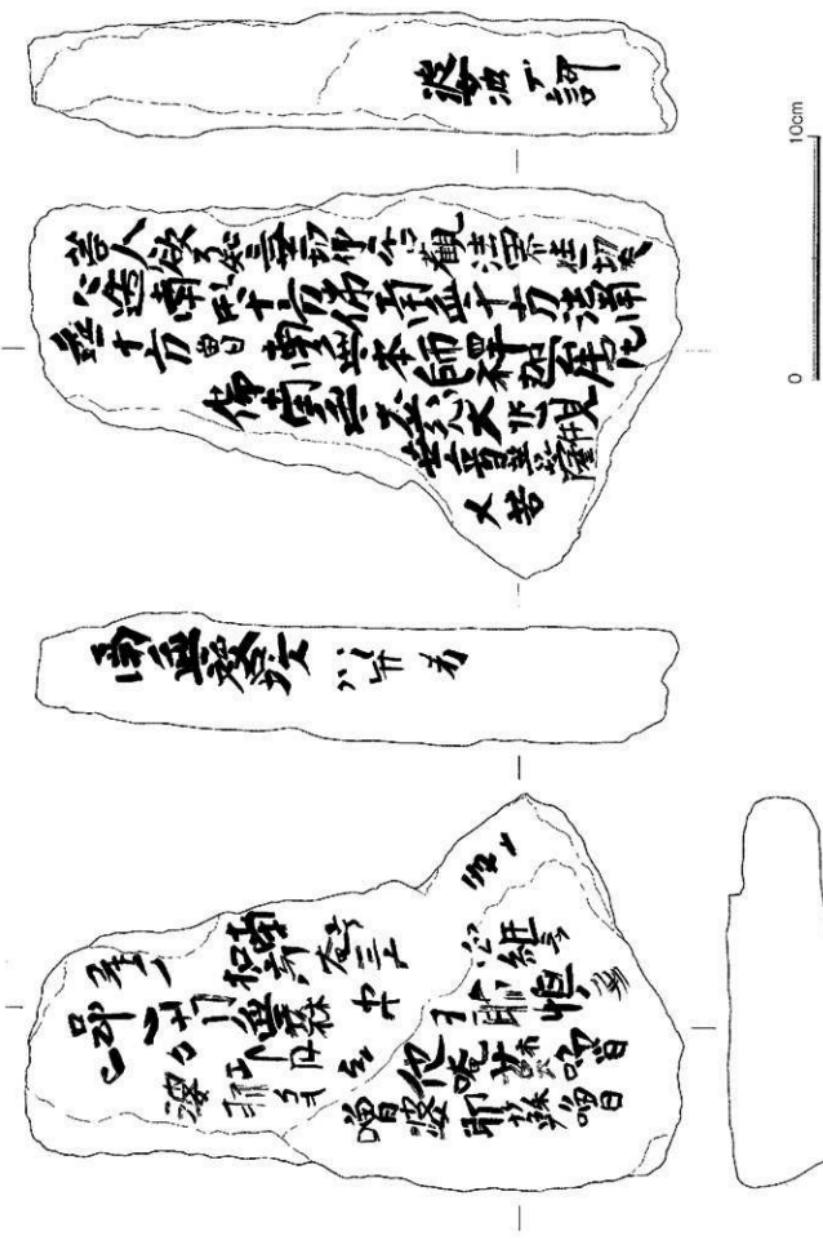
長さ24.3cm、幅15.5cm、厚さ6.8cmを測る。「宝鏡印陀羅尼」の巻頭部分である。L 2-001と同様、大きい石に写経しているが、太くかすれた文字の特徴から同一の書者であろう。



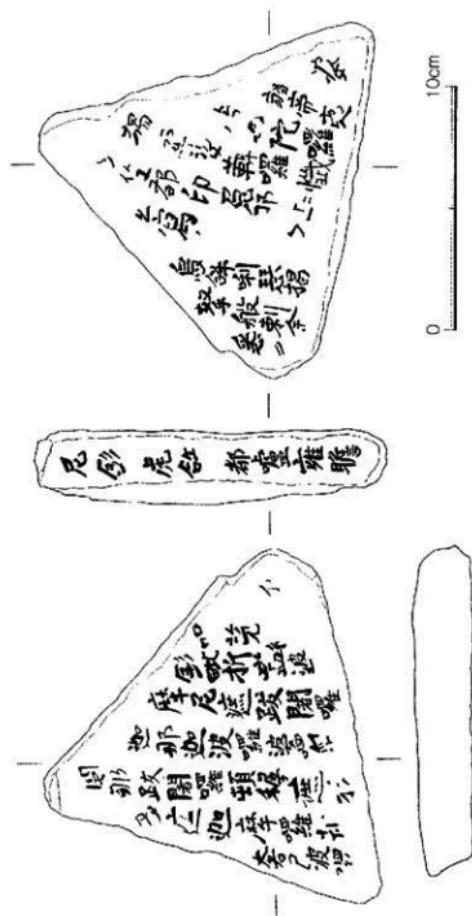
■第27図 R3-004 (1/2)



■第28図 L1-087 (1/2)

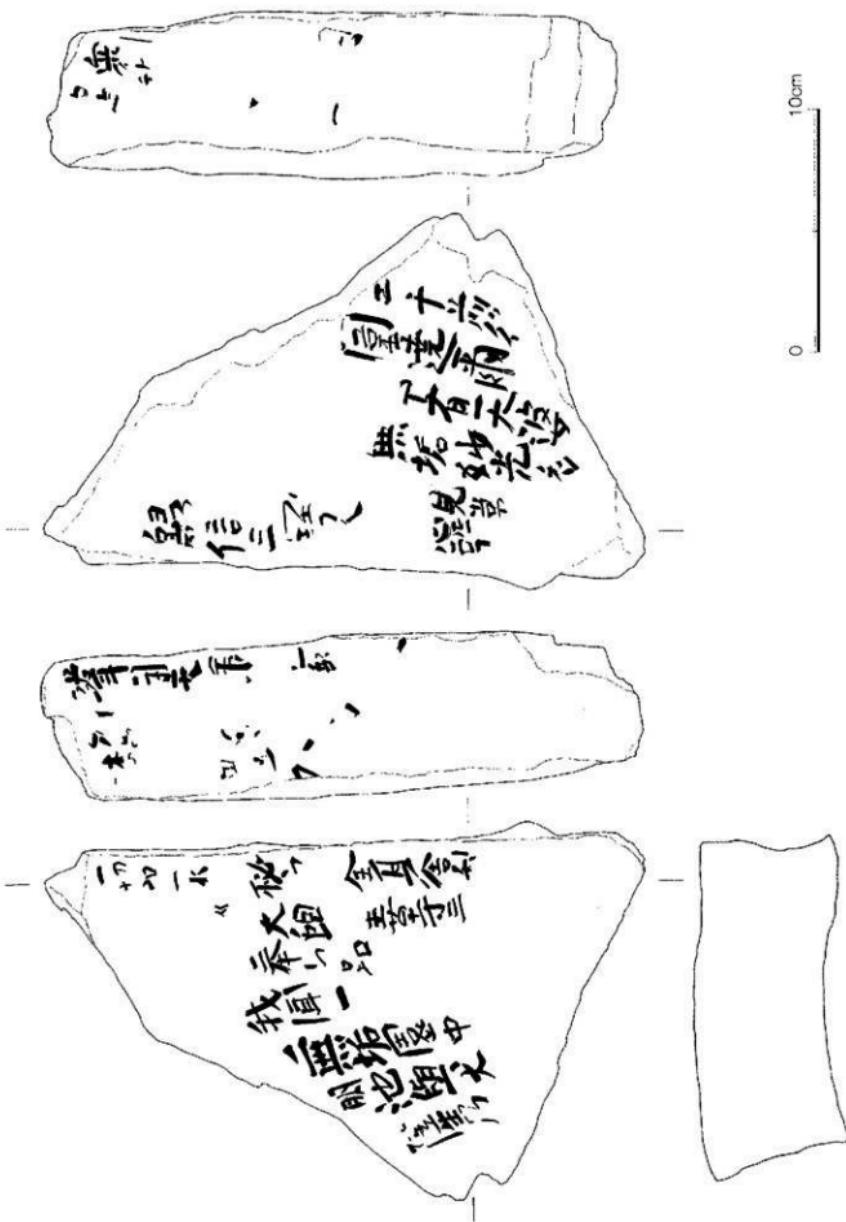


■第30圖 L2-045 (1/2)





■第31圖 L2.049 (1/2)



■第32圖 L2-086 (1/2)

#### 4 接合経石からみる写経から埋納までの流れ

18年度の経石取り上げ時には、基壇の加重を受けて無数のヒビの入った経石もあり、土器と同じように接合作業の必要性を感じたが、経石同士が接合するというのはほとんど考慮していなかった。それは、写経と埋納という作業が繋がりをもってスムーズに進められたと考えていたからで、例えば写経したらその場ですぐに埋納するといったようなイメージがあった。

第3章第3節に記したとおり、離れた箇所に埋納されていた経石が接合するというのは、埋納時にはすでに割れていたことを示している。

中央基壇からは4,714点の経石が出土している。写経を始めたのは経石の年号銘から安永3年8月と考えられ、勝頼宝篋印塔の銘から翌安永4年3月11日に中央基壇分は完成しているのであろうから、作業期間は7か月程度だったと推測される。これだけの量の経石を限られた期間内に用意するため、作業場を確保し複数人で行ったのであろう。作業場が離れていると、作業の効率上写経が終わった経石は一時的に入れ物に溜めておく必要があり、このときに経石が割れたのではないかと考えられる。

だが、入れ物内で割れたとしても、その後基壇内の石室に埋納する際に丁寧に納めれば、上下左右の違いだけで大きく位置が離れることはないはずである。実際の接合経石をみても、同じ取り上げ層での事例が多い。それに対し、K Y · H J · N K の記号を越えての接合もある。中段石で囲まれた石室は大きな仕切り石で3室に分けられており、自然にずれて位置が変わったということはありえない。記号を越えての接合には、丁寧な埋納というのではなく、まとめてドサッと入れ込んだような印象があり、入れ込んだ作業あるいは入れ込んだ後に均す作業等により離れたのではないかと思われる。石室内の仕切り石の上にはさらに上段の仕切り石が据えられるが、この石はわりと無造作に経石層の上に置かれていた。この扱い方は石を積んだときの隙間に小蝶を咬ませる方法と変わりない。

中央基壇の経石は砂とともに埋められており、当初は経石の保存と安定のため隙間なく砂を入れたものと解釈していたが、基壇の強化のためとも考えられる。

なお、経石整理中経文の解説時に多々みられたことであるが、一つの経石の複数面に写経されている経文は、かならずしも繋がっているとは限らない。普通の感覚では第1面から写経を始め、第1面が文字でいっぱいにならざるを得ないが、第2面は違う行から新たに書き始めることがある。複数の面を十分に解読できた経石の点数は少ないものの、そういう傾向がみられるというのは、石に写経する行為に何かしらの法則があったことが想定される。新たな行から書き始めることは写経文字数を減らすということになり、読経時に経典をアコーディオンのようにあおる「転読」のような、省略のための法則があったのだろうか。経石を作りそれを埋納するという宗教行為自体が廃れてしまった現在、どのような作法・法則に則ったのか、個々の経石の分析や他の事例から推測していくしかない。

左右の基壇から出土した経石は、それぞれの基壇内の接合に止まる。砂を入れ充填した形跡はなく、中央基壇と全く異なる方法で埋納したと思われる。そのことについては、次節に記す。

#### 第2節 中央基壇と左右基壇の違い

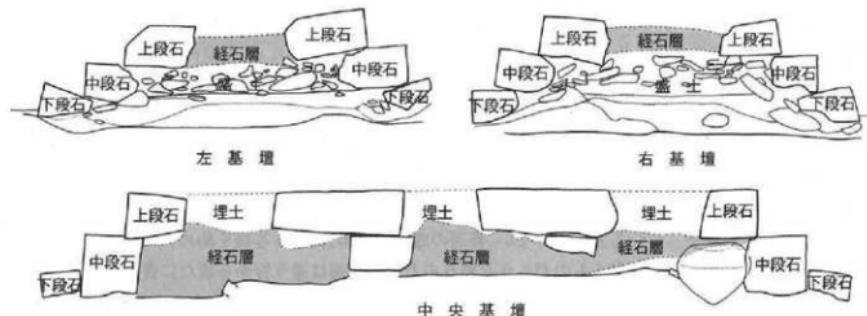
中央基壇と左右基壇の違いは、先述したとおり3段の基壇の積み方にある(第33図)。中央基壇は中段石を据え、その上に上段石を乗せ、下段石は中段石に沿わせている。先に中段石を据えることにより、経石を埋納するための石室を作っている。一方左右基壇は、まず下段石を据え、その上に中段石、さらに上段石を乗せる。中段石は下段石より内側へオーバーハングするため、落下を防ぐためには下段石の高さまで土を盛ったうえで中段石を乗せなければならず、上段石もまた同様である。結果的に、上段石で囲まれた、上段

石の厚さ分のスペースが埋納空間として使われている。

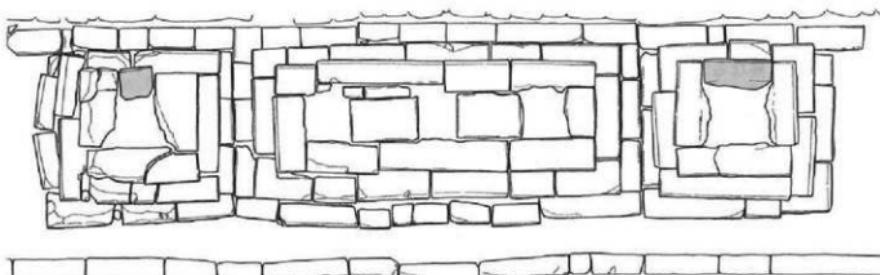
この違いは、中央基壇が安永4年であるのに対し、左右基壇は安永9年という、建立時期の違いに起因するものと考えてきた。しかし、発掘調査の成果から左基壇と中央基壇の土層に共通点がみられ、構築に時間的な隔たりはさほどないものと思われる。別の理由を考えたい。

まず一つは、供養の主体者の違いである。中央基壇は勝頼宝篋印塔の銘にあるとおり、当時の住職である要導が執り行っている。左右基壇は、殉難者供養塔に銘は刻まれていないが、右基壇出土の「戒名文字資料R 1 - 0 0 1」にある「天瑞」なる人物が執り行つたと考えられる。天瑞がどのような人物なのか史料がないため不明だが、戒名文字資料のように回向文や勝頼らの戒名を記し納めるのは、景德院第11世として供養塔を建立した要導でさえ行つていい行為であるので、相当の格をもった人物なのだろう。要導と天瑞、この二人の主体者の違いが基壇に影響しているのであろうか。

次に、経石を埋納するタイミングによる違いである。石に經典を写経するのは、石の収集から始める大変手間のかかる作業で、それなりに時間がかかる。石工の仕事と並行しながら写経した場合、中央基壇では中段石が据えられた時点で経石は埋納できるので、その工程に合わせなければ以後の工期に支障が



■第33図 各基壇の積み方



■第34図 左右基壇の上段石

である恐れがある。そういったことから、前年の8月から7か月程度の写経期間を設けて取り組んだのであろう。中央基壇の施工中に左右基壇の構想もあったとすると、左右基壇の構造も中央基壇に倣い石室方式を探るか、あるいは3つの基壇に分けることなく、一つの大きな基壇とする方法もあったと思われるが、そうしなかったのは、中央基壇のようにタイミングよく経石を埋納できなかったからではないのだろうか。

左右基壇の上段石を観察すると、四石で四角に囲まれているが、背後の一石は差し込める構造になっているのに気付く(第34図)。特に左基壇上段石の背後の一石は長さが30cmほどしかなく、大人一人で十分動かすことができる大きさである。つまり、左右の殉難者供養塔は先に完成してしまうが、経石埋納が遅れるため、完成後でも埋納できる基壇構造としたということである。供養塔完成後に背後から経石を入れたと思われる可能性は、中央基壇のように経石とともに砂を充填していないこと、小動物が巣を作るほどの隙間が空いていたこと、戒名文字資料R 1-001の出土位置が、中央を意識しながらも全くの中心ではなくややずれていること、などからも導かれる。

中央基壇と左右の基壇は、構造は異なるものの見事な一体感を形成している。安永4年と9年の5年の差は、あくまで経石の写経や埋納時期の差であって、基壇や供養塔の建立時期の差ではないと考えられる。

### 第3節 中央基壇供養塔の並び方

中央基壇の勝頼親子の供養塔は、勝頼宝篋印塔を中心で、その右側に北条夫人五輪塔が、左側に信勝五輪塔が立つ。宝篋印塔は飛びぬけて高いが2基の五輪塔はほぼ同じ高さで、左右の殉難者供養塔まで合わせてみると、きれいなシンメトリーを呈する。

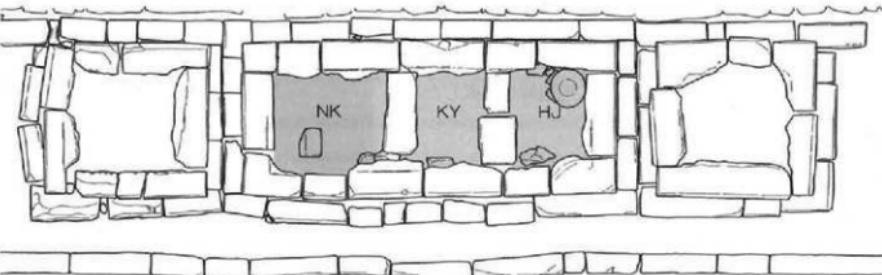
平成18年度の経石取り上げ時に、中央基壇上段石を解体したところ、中段石の石室全面にびっしりと経石が埋納されている状況が確認できたが、同時に石室は2本の石で3室に仕切られており、信勝の下部が最も広い区画をもち、勝頼・北条夫人の下部は、あたかも残ったスペースを二分したように等しくみえた(第35図・写真18)。埋納経石層も調査の結果、信勝の下部は最大65cmほどの厚さをもつに対し、北条夫人の下部は15cmと極端に薄かった。出土経石数



■写真18 中央基壇の経石石室



■写真19 中央基壇の台座比較



■第35図 中央基壇 中段石と仕切り石による石室

を比較すると、N Kは53%、K Yは31%、H Jは16%となり、信勝の下部から出土した経石が半分以上を占めている。

概にはいえないが、経石の量は供養の篤さに関係すると思われる。とすれば、左側に最も篤く供養されるべき人物である勝頼の宝篋印塔が据えられ、中と右側には五輪塔が据えられていたのではないだろうか。中と右側のスペースが等しいというのは、五輪塔の規模が等しいことにも通じる。その五輪塔であるが、実際には台座の高さが異なる。3基の供養塔とも台座の蓮華の彫り方は同じであるが、蓮華下の高さは勝頼・北条夫人・信勝の順に、ほぼ一寸ずつ低く作られている(写真19)。そのため、中に北条夫人五輪塔、右側に信勝五輪塔という順番になる。

いさか飛躍した考であるが、その可能性を他方から示唆するものとして、石材の損傷を挙げておく。

一列に並んだ基壇をみると、左基壇の損傷が著しい。中央基壇は左基壇近くに若干損傷がある。右基壇には大きな損傷はみられない。これらの損傷は過去2回の火災—弘化2年(1845)と明治27年(1894)—によるものと考えられるが、供養塔も同様に被害を受けている。上部は倒壊による被害もあると思われるので、台座だけで比較すると、勝頼・北条夫人の供養塔の損傷がひどく、信勝の供養塔の損傷はわずかである(写真20)。中心よりも左側の被害が大きかったとすると、勝頼・北条夫人の供養塔も中心又は左側にあったと考えるほうが矛盾ない。

仮に、当初は左から勝頼・北条夫人・信勝の順で据えられていたとするなら、現状の通りシンメトリーに直したのはいつだろうか。

信勝の台座、中央基壇右側、右基壇に大きな損傷がみられないことから、2度の火災のいざれか、あるいは両方が、墓の中心より左側へ被害を与えたものであろう。弘化2年の火災後の復旧により現位置に直したのであれば、明治27年の火災により、信勝供養塔の台座が損傷していてもおかしくはない。仮説に仮説を重ねようだが、明治時代に直したと考えたほうが自然と思われる。



■写真20 各供養塔台座の比較  
(上から 勝頼、北条夫人、信勝、  
左手殉難者、右手殉難者)

## 第4節 文献からみた武田勝頼の墓と二百年遠忌

武田勝頼の墓についての文献はきわめて少ない。

景德院は徳川家康の命により建てられた寺で、天正16年(1588)に完成したといわれているが、第1世拈橋長因が天正19年に遷化後、寛永8年(1631)まで広嚴院兼帝の無住寺となってしまう。その後広嚴院を離末し慈寧寺から勝國良尊を第2世として迎えるが、勝国は師である竹山忍徹を推して中興開山とした。寺の開創期にすでに混乱が生じ、さらに2度の火災に遭い、寺に残されている文書史料はほとんどない。さらに、明治27年の火災は山野地区の大火灾だったため、地域の史料も失われた。

そのため、文献から武田勝頼の墓について探るのは容易ではないが、いくつか記述のある文献を取り上げてみる。

### 1 「峠中紀行」

「峠中紀行」は、荻生徂徠が宝永3年(1706)に甲府城主柳澤吉保の命により來申した折の紀行文で、勝頼の二百年遠忌以前の様子が判り、貴重である。

「而して景德院に至る。雨もまた小さくやむ。山門南に向いぬ。門に入りて後主の廟に謁す。後主郎君大人的影像。みな新造するもの。ただ俗觀るべからず。僧の麟房円首座。將校從死者二十三人。虞氏輩十六人。みな牌子なり。廟の前に後主うずくまり自裁する所の石二つあり。その外を竹落せり。謁し終わり簷室に詣り、住持の僧余に語る。遺墳の所在を問えば、すなわち云う。始め後主の兵を解くとき、州を閉ざし麻のように乱れる。後事を修める者なかれ。僧拈橋という者、広嚴院に在りて、之を聞き来たり赴く。既に七日を過ぎ、屍に血淋滴す。君臣わきまえず、すなわち同じく一墳に葬る。即ち今の廟の建つる處。故をもって別に窀穸の所なし。」(飯島訳)

記述をみると、「廟に謁す」のように御靈屋・甲將殿が墓としてあり、勝頼・北条夫人・信勝の像が安置されている様子が判る。この像は「新造するもの」であるが「俗觀るべからず」と、神聖な扱いを受けている。また、殉難者は僧2名、將校33名、女子16人、計51人で、それぞれ位牌が安置されているとある。廟の前には「自裁する所の石二つ」があり、これは勝頼たちの生害石を指しているものと考えられる。ここにみえる状況は、現在とあまり変わらない。荻生徂徠は住持に「遺墳の所在」を問うと、「広嚴院の拈橋が来たが、すでに7日を過ぎており、死体から血が滴り落ちていた。君も臣も見分けがつかないため、同じように一つの穴に葬った。それはすなわち今の廟が建っている所である。これとは別に手厚く葬った墓はない。」といったと記される。

ここで注目されるのは、当時の景德院の住職は「君臣わきまえず、すなわち同じく一墳に葬る。即ち今の廟の建つる處。故をもって別に窀穸の所なし。」と伝え聞いていることである。宝永3年は、武田家が滅亡してから124年後になり、伝聞情報にしてもある程度正確に伝わっていると思われる。このときの聞き取りが正しければ、甲將殿の下に多数の遺体を埋葬した大きな土壙があることになる。

### 2 「甲斐国志」

次に『甲斐国志』の記述をみてみる。『甲斐国志』(以下、「国志」という)は甲府勤番支配であった松平定能が編集した甲斐の地誌で、文化11年(1814)に成立した。

「天童山景德院 田野村 曹洞宗下總州国府台總寧寺ノ末、御朱印高七十五石余 一二田野寺ト称ス 当寺ハ武田勝頼落命ノ地タルニ因テ天正十年午七月 神祖御入國ノ刻ミ新規建立仰セ出被ル田野ノ郷一円ニ御寄附菩提所ト為シ給ヘリ 殉死ノ士士屋懇三ヲ始メ残リナク 位牌ヲ立テ茶湯燒香嚴密為ル可シ

之ニ仍テ初鹿野村ノ分内ニテ一所御寄附ナリ 山中広嚴院ノ七世拈橋侵住持職ヲ命ゼラレ同十六年造立落成ス 拈橋寂シテ後無住ナリ山中ヨリ兼帶スル事殆ド五十余年 寛永中ニ及ンデ武田ノ旧臣当幕府ニ奉仕スル者數人云々ノ事アリテ中山ヲ離未シ總寧寺ニ隸セシム」

「莊嚴頗ル備ハレリ本堂(十間六間)本尊ハ釈迦・文殊・普賢、靈屋(三間二四間額ハ甲將殿、勅賜紫衣僧空子ノ書)、勝頼・夫人・信勝ノ影像三・及ビ殉死ノ輩僧二人士二十三人侍婢十六人ノ牌子ヲ列ス 開山堂(三間四間)水平道元、古開山拈橋、當開山ノ木像世次ノ位牌 東照宮及ビ御代々ノ尊牌并ビニ機山信玄ノ牌を安シ又珠光院無角道牛居士トアルハ尾畠景憲ノ牌ナリ 総門(額ハ山号)三門(額ハ寺号)衆寮(八間四間)庫裡・鐘樓等ナリ」

「今ニ勝頼夫婦信勝三人ノ寿像并ニ殉死ノ士三十五人侍婢十六人ノ牌子ヲ靈屋ニ安ズ 又説ニ拈橋始メテ法名ヲ施ス時戰場ノ事ナレバ殉死ノ内ニ姓名ノ漏レタル人モ有ルベシ 拈橋ハ蚤ク廣嚴院ノ席ヲ譲ルシテ彼ノ地へ移リテ草庵ヲ營ミ住セリ サレドモ寺建立ハ未ダ就ラズ數年廣嚴院ノ兼帶所トナル 寛永中ニ及ビテ離木ノ事アリ 而シテ今ノ莊嚴全ク備ハリタル趣ナレバ其ノ際ニ牌子ノ紛失セシ事モ有ルヤラン 士四十六人侍婢：十三人ト記シタル史録モアリトナ」

先に引用したのは「仏寺部」の景德院の創建についての記述であり、我々がすでに知っている内容である。次に引用したのは同じく「仏寺部」から景德院の建物についてである。この内容からは伽藍配置までは判らないが、総門と三門が建ち、衆寮まで備えた大寺院であることが判る。しかし、安永4年の墓建立後の編集であるにもかかわらず、墓に関する記述がない。その代わり、甲將殿とその中に安置されている三人の像と、殉死者の位牌のことが書かれている。墓建立については情報が伝わっていなかったのだろうか。

後に引用したのは「古跡部」から、「仏寺部」の記述とかぶるところもあるが、墓についての記述はここにもみられない。興味深いのは、創建時の不安定な状況から今の莊嚴な伽藍が整備されていく際に、殉難者の位牌が紛失しているのではないか、と疑っているところである。殉難者の人数についても「士四十六人侍婢二十三人と記した史録もある」ので、編者も景德院については相当困惑したものだろう。それゆえ、確実と思われる情報のみを採用し、特に現地を実見するようなことをしなかったのかも知れない。

### 3 「勝沼古事記」

「勝沼古事記」は、甲州市勝沼町勝沼の個人宅に所蔵されている記録で、表題に「勝沼古事記」もしくは「故事記」と書かれている。この記録は、坂本勘解由直昌というものが天正10年3月の武田家滅亡に際し、再被官を好まず勝沼村に定住し、それ以来勝沼村が宿として発展していく途上にいろいろと見聞した事柄を記述し、さらにその子孫がこの記録を受け継いでいったもので、その年代の幅は天正11年から慶応元年に至るまでの長期間の記述となっている。

勝頼の墓についての直接の記述ではないが、安永8年(1779)の項を挙げる。

#### 「田野山ニ而勝頼公様御法事在」

ここに書かれている「御法事」とは、勝頼の二百年遠忌のことである。二百年遠忌は勝頼の墓が完成した安永4年ではなく、安永8年に當まれていたことになる。

#### 4 「保坂家文書」

「保坂家文書」は甲州市塙山赤尾の個人宅に所蔵されている文書・記録で、全208点が甲州市指定文化財となっている。保坂家は赤尾村の名主・長百姓を勤めており、記録は宝永5年(1708)から大正8年(1919)に及ぶが、最も特徴的なのは延享2年(1745)から大正8年にわたり、同家の歴代当主によって書き継がれてきた129冊の日記である。

そのうち、「安永三甲午年記」(写真21)には、安永3年から天明4年までの記述があるが、先の『勝沼古事記』と同様、二百年遠忌が安永8年に執り行われたことを示す資料である。

「一 武田公様田野御法事式百年御忌、三月八日より十四日迄と被仰出候所、御停止ニ付延引、十五日より廿一日迄御法要有之候事、西の丸様御遠行十四日迄御停止ニ候事」

「一 御焼香ニ罷出候、去年秋為知之御使僧來ル事、市兵衛殿同道候、三月十六日參詣、はさみ箱ぞうり取候事、上下ニ而御焼香候、はかま羽折ニ而玄関迄參ル事、自分当日帰り、市兵衛殿詰居詰番勤被申、喜三郎殿も被參、市兵衛殿替被申廿一日迄詰居被申候事、■々敷御佛事御物入御用多沙汰ニ候事」

安永8年の記述であるが、「御法事」について『勝沼古事記』よりも詳しく書かれている。当初3月8日から14日まで二百年遠忌法事が執り行われる予定であったが、「西の丸様」の都合により、15日から21日に延期すること、遠忌法事については前年の秋に使いの僧が知らせに来たこと、3月16日に參詣した折にははさみ箱・草履取の供を連れ、はかま羽織の正装で、「上下」の2度の焼香をしたこと、自身はそのまま帰り、同行した市兵衛は詰番を仰せつかつたが、市兵衛の代わりに喜三郎が詰番を21日まで勤めたことなど、当時の様子が非常によく判る。

当時は7日間にも及ぶ法事が執り行われ、喜三郎のようにそのまま詰番を勤める者も多かったのだろう。

このように、勝頼の墓は安永4年に建立されたが、実際の法要は4年後の安永8年に行われていることが判った。本来景徳院にはこのときの奉加帳などが保存されていたのだろうが、2度の火災で焼失してしまったと考えられる。同じ火災で被害を受けながらも、勝頼の墓に彫られた銘は大きな被害を受けることなく、そこに記された内容から「二百年遠忌=安永4年説」が一般的に知られることとなった。

遠忌の様子を伝える資料として、向嶽寺(臨濟宗向嶽寺派本山・甲州市塙山上於曾)の開山四百年遠忌の例を挙げる。向嶽寺では天明4年(1784)に開山抜隊得勝禪師の四百年遠忌を修しているが、このときの様子が『向嶽寺史』(関口貞通著)に記されている。

「(天明元年)六月末から近隣五ヶ村から一国勧進がはじめられた。役僧、伴僧、それに草履取などを伴つてものものしく行われるのである。この時の一国奉加の合計は、甲金一七九両余。米麦初三八六俵であった。」  
「本番の遠忌は天明四年の二月十四日から二十日までの七日間にわたりておこなわれ、石和代官所から役人が出て警護に当たるが、五ヶ村も分担で境内警護の人数を出した。」

「七日間、一日ずつ交代で山内の和尚が焼香し、それに両班の僧侶が相伴する。なお諷経(ふぎん:声をあげて経を唱えること)に近隣の禅寺の僧侶やお供が来山する。このときは惠林寺(甲州市塙山小屋敷)から



■写真21 保坂家文書

五十七人、清白寺(山梨市三ヶ所)から九人、景德院から五十五人、計百二十一人の僧侶、これに侍その他の供まで入れると総計二百六十人というおびただしい数にのぼる。こうした協賛は寺院相互に行われていたものと、明和六年の恵林寺の「信玄公二百年遠忌」の折には、向嶽寺からは「年番住持松山和尚衆僧二十五人」が出て諷経を勤めている。」

向嶽寺の場合は開山の遠忌で、諷経を7日にわたり行っている間に焼香の客は絶えず、それだけ僧侶の動員ばかりでなく、来客の接待のために僧侶以外の動員も多かったのだろう。勝頼の二百年遠忌にあてはめて考えると、景德院はそもそも勝頼の慰靈のため建立された寺院であるので、開山と同様の手厚い法要が営まれたものと考えられる。なお、向嶽寺開山四百年遠忌には景德院からも55人が手伝いに来ており、向嶽寺に最も近く、かつ、同じ臨済宗である恵林寺の59人に迫る人数であるのは驚きである。向嶽寺開山四百年遠忌は勝頼二百年遠忌からわずか5年後のことなので、勝頼二百年遠忌には向嶽寺からも相当数の僧侶・関係者が景德院に動員されたことが想像できるとともに、55人の寺院関係者を動員できるほど、寺院として充実していた時期であったことが窺える。

## 第5節 二百年遠忌と山門建立

先に述べたとおり、勝頼の二百年遠忌は安永4年ではなく安永8年に執り行われたことが判った。しかし、安永4年には勝頼・北条夫人・信勝の墓は完成しており、左右の殉難者供養塔にしても、ある程度工事は進んでいたものと推測できる。二百年遠忌をすぐに行わず、4年も待った理由はなんであろうか。

ここで注目されるのは、景德院山門(県指定文化財)である。山門は安永8年に竣工しているが、扁額の墨書によると建物は前年に仕上がっており、扁額を掲げた安永8年をもって落慶としたという。

のことから、勝頼の二百年遠忌と再建の山門落慶を意図的に合わせたと考えられる。二百年遠忌法要は3月15日から21日まで行われ、また、山門落慶は扁額墨書に「安永八年己亥三月」とあるので、こちらも同じ期間をとっていると推測される。「保坂家日記」の中に「上下ニ而御焼香候はかま羽折ニ而玄関迄參ル事」とあり、そのうち「上下ニ而御焼香候」とは、勝頼の墓供養と山門落慶の2度の焼香のことではないだろうか。また、参詣の目的が焼香だったので「玄関迄參ル事」とし、その日のうちに帰ったものと思われる。

二百年遠忌は、伽藍整備という大きな事業の中的一大イベントと位置付けられていたのかもしれない。

皇和安永八年  
己亥三月值  
武勝忌二百年  
遠忌額次  
前年創建山門  
山内俊賀  
穿之 (山門扁額墨書)



■写真22 景徳院山門と山門扁額

## 第6章 総括

### 第1節 経石について

武田勝頼の二百年遠忌を執り行つたことについて、その最大の特徴は墓中に経石を埋納したことである。県内では大名クラスの墓について発掘をした事例がないため、これが当時として一般的な供養方法なのか、あるいは特殊な例であるのかは判断できない。今後史跡指定されているような墓所の整備事業などにより、発見される事例もあるのではないかと考える。故人の供養ではないが、非常に似た例がある。平成12年に忠林寺鐘楼修理工事を行ったところ、地中より法華經を写経した経石が49点出土した。石は丸く角がとれたみかけ石で、河原から採取したと思われる。石の表面には同じ大きさで隙間なく経文が書かれており、筆跡からは一人で全て書いたと推測される。この経石は、出土状況から鐘楼建築の際の地鎮のため埋納されたものと考えられる。

山梨県教育委員会がまとめた『民間信仰遺跡分布調査報告書—近世の経塚—』(平成13年)によると、県内で経石が出土した、あるいは石碑等により経石が埋納されていると思われる場所は60箇所あり、内訳は銅製経筒を伴うものの4箇所、一石経が出土しているもの8箇所、経碑が建っているものの39箇所、経碑が建ちかつ一石経出上を伴うものの8箇所、出土品はないが「経塚」として保存されているもの1箇所である。このうち銅製経筒を伴う4箇所は中世の遺跡であり、残りは年不詳もあるが近世のものが多い。

出土した一石経をみると、その多くは一つの石に一文字を書いた一字一石と呼ばれるもので、その中に少量の多字一石が含まれている。法華經を写経すると一字一石なら7万点ほどの石が必要となり、経塚造営には人勢の参加が必須となる。大勢の人と多数の経石により大きな功德が生ずるといった「多数作善」思想が、近世の一石経塚造営の根底にあるといわれている。

一方、武田勝頼の墓出土の経石は多字一石のみで構成される。これは故人供養という目的のため經典を埋納したため、紙に写経して納める方法もあったのだろうが、石が選択されたのは、どこでも誰でも多量に入手できる、紙は湿気や虫害により劣化するが石は劣化しない、などの理由からだろう。5千点を越える写経用の石を集めることは多くの人の協力が必要で、その点「多数作善」思想がみえる。本筋は供養なのだが、庶民はそこに供養以外の功德を期待し、この事業に協力したのだろう。

今回の調査により、県内で初めて故人供養のための経石埋納という事例が明らかとなった。これまで確認された経塚の性格を分析し、出土した経石が功德を得るために、地鎮のためか、供養のためかを分類した上で、今回の事例を評価する機会が必要と考える。

### 第2節 武田勝頼の墓所について

山梨県の史跡に指定されている「武田勝頼の墓」は、供養塔が立つ場所に限られ、縁石に囲まれた長軸12.4m、短軸2.9m、面積36m<sup>2</sup>ほどの範囲が該当する。しかしここは、あくまでも二百年遠忌により建立された墓の範囲である。

二百年遠忌より前の様子については資料が少ない。先に引用した荻生徂徠の『峠中紀行』や『甲斐国志』には、靈廟(御靈屋=甲冑殿)内に勝頼・北条大人・信勝の像が安置され、その両脇に従者の位牌が置かれている様子が記されているため、靈廟そのものが墓だったと解される。『峠中紀行』には「同じく一壇に葬る。すなわち今の廟の壇つところ」と、墓壇の位置まで記しかつ墓壇と廟の関係を示している。

平成20年度の発掘調査では、墓壇の位置までは確認し得ず、また、勝頼らの最期を推測させるような遺物も出土しなかったが、当地を大造成したことが判明したのは大きな成果だった。本来当地は南西方向

に張り出した尾根だったと思われるが、造成を行った結果広い平坦面を有するに至った。造成の目的は御靈屋を建立するためと考えられるが、勝頼一行がこの地に止まつたとき、「平屋敷」に柵を作り陣所としたという伝承があり、「平屋敷」が当地だとすると屋敷のための造成だったということになる。だが平屋敷に関しては何ら史料がなく、やはり御靈屋など慰懃のための施設を建設するためと考えるのが自然だろう。

造成の時期については、盛土を近くの沢の砂礫に求めているとみられることから、遺物が全く出土せず、決め手に欠ける。田野寺を建立した天正年間又は二百年遠忌を行った安永年間が考えられるが、今後調査を継続していくことにより判明するものと考える。ただ、「峠中紀行」には「廟の前に後主うずくまり自裁する所の石二つあり。」と、御靈屋の前に生害石が二つ置かれていることを記しており、18世紀初頭にはある程度の広い敷地があったことが判る。また、勝頼の墓の背面の石垣は人為的な高まりを切って築かれていることから、二百年遠忌より前に造成を行っていたのかも知れない。

『峠中紀行』はさらに、「故をもって別に竈夢の所なし。」とも記している。「そのため別に手厚く葬った墓はない」ということだが、勝頼が亡くなつて120年以上経過しているものの、荻生徂徠は当時の景德院の僧や田野村の住民からの聞き取りを記録しており、重視すべき内容である。

これまで概観してきたとおり、武田勝頼の墓とは二百年遠忌の供養塔だけではなく、甲将殿(御靈屋)を含めた一帯が墓所なのである。そのためこの一帯は聖域扱いとされ、景德院関係者の無縫塔が高まり上に並ぶ以外は、寺院としての施設・機能を有していない。明治27年の火災により山門を残し伽藍を焼失した後も、甲将殿の再建を優先しており、明治30年代には現在の甲将殿が建てられたのに対し、本堂・庫裏は昭和に入ってから再建されている。武田勝頼の墓を後世まで保存するためには、供養塔も当然だがそれ以上に「墓所」あるいは「墓域」として景德院の一画を占める甲将殿一帯について、正しく認識し保護保存に努めていかねばならないと考える。

### 第3節 古戦場としての景德院

前節で『峠中紀行』を引用し、廟(=甲将殿)の下に墓塚が



■写真23 甲将殿



■写真24 保存修理完了後の墓



■写真25 甲将殿内の坐像



■写真26 勝頼生害石・北条夫人生害石

ある可能性があること、他に墓はないこと、等を記した。死体が多く一つの壇に葬った、そこに廟が建った、他に墓はない、という記述は、全ての供養を同位置で済ませたという点で一貫性があり、当地が戦場であったことを暗示している。そのため発掘調査では、古戦場を裏付ける遺物の出土も期待していたが、予想に反して出土品はなかった。

一方、甲将殿の中には景德院の什物が保管されており、甲冑の残欠や馬具、弓等の武具もみられる。これらの由来ははっきりせず、境内から出土したものとも思われたので、写真撮影し竹村雅夫氏に鑑定をお願いしたが、戦国末期の遺物ではないとのことだった。恐らく、長い年月の中で寄附等により景德院に納められたものだろうと思われる。

現時点では景德院が、勝頼一行が最期を迎えた古戦場であったという証左はない。『峠中紀行』や『甲斐国志』等の記述や、生害石・没頭地蔵の存在など、傍証もわずかである。景德院だけでなく田野地区全体をみながら検討する必要があろう。

#### 第4節 まとめ

これまで発掘調査の成果や断片的な史料等により、武田勝頼の墓について記してきた。今回の調査の成果は、経石の出土によりこれまで論じられていなかった墓の経歴や成り立ちが、不鮮明ではあるが程度判ってきたことだろう。

武田勝頼の墓についての一般的な理解として、『大和村の文化財』の「武田勝頼の墓」の項を引用する。

武田勝頼は戦国の雄、武田信玄の第4子である。天文15年(1546)、諫訪頼重の娘を母として諫訪に生まれ、諫訪四郎勝頼と名乗る。信玄没後武田家の家督を継ぐが、天正3年(1575)長篠の合戦に敗れ、家運は傾きはじめ、それから7年の後同10年(1582)3月11日、織田・徳川の連合軍の侵攻によって、田野の地で激戦の末自刃して果てる。新羅三郎義光以来、栄光に輝き、連綿と続いた名門武田家は、ここに400数十余年の長い歴史の幕を閉じる。

景德院境内西南隅の甲将殿の裏手に勝頼の墓所がある。墓所には3基の石塔があり、うち中央の宝幢印塔が勝頼の墓、左右の五輪塔のうち向かって右が北条夫人、同左が嫡男信勝の墓、両端は殉難家臣たちの墓である。これら墓塔は、200年遠忌の安永4年(1775)3月、勝頼らが自刃した地に建立されたものである。3段の基壇上に基礎を置き、蓮華座上に立つ3基の墓塔のうち、中央塔の総高は3.22mにもおよび偉大であるが、墓塔には火災による剥離跡も残る。松の樹間の木漏れ日のなかに建つ墓塔の前にたたずむと、武門のならいとはいえ、人の世の運命の虚しさが胸に迫り、勝頼らの無念がしのばれる。

上の文章では、勝頼・北条夫人・信勝の供養塔と左右の殉難者供養塔の建立を同時期とし、二百年遠忌とした安永4年を当てている。墓の保存修理により基壇を解体すれば、経石は出土しなくとも中央基壇と左右の基壇は構造が異なることは判別できるが、戒名文字資料R 1 - 0 0 1 が出土しなければ、「二百年遠忌=安永4年」に疑いをはさむことはなかったかも知れない。

と同時に、文献・史料のような文字資料がいかに重要であるかを再認識させられた。二百年遠忌の様子、あるいはそれ以前の様子を推測し理解するためには、いっそうの史料調査が重要である。

武田勝頼の墓によく似た例として、惠林寺(甲州市塩山小屋敷)にある武田晴信の墓を挙げることができる。寛文12年(1672)に、晴信百年遠忌で建立されたものだが、墓の前にある御靈屋・不動堂は柳澤時代の



■写真27 武田勝頼の墓域

宝永年間に建てられた。御靈屋と幕がセットで供養されることが共通し、幕も宝篋印塔と五輪塔で構成されている。また、両者とも遠忌によって幕が建立・整備される以前の供養の姿が判然としない。晴信・勝頼親子の幕なので、寺院の違いはあってもお互いに影響を受けながら供養をしてきたと推測されるので、文献がよく残っている恵林寺及び武田晴信の墓を精査することによって、武田勝頼の墓についての理解も進むかもしれない。

混乱の中で亡くなった武田勝頼の供養の仕方は、その時々で大きく変化していったものだろう。今後文献調査や継続的な発掘調査によって、さらに輪郭が鮮明になるものと考える。また、全国的な事例として大名クラスの墓の造営の方法、特に勝頼のように不幸な亡くなり方をしたときの供養方法など、広い視野での比較検討が必要であろう。

平成18年度の経石出土より21年度の修理事業再開まで、景徳院並びに景德院檀家総代会の方々には大変なご迷惑をおかけいたしました。本来単年度の事業であったものが、教育委員会の計画により3ヶ年も先送りされたにもかかわらず、ご理解ご協力を賜りました。檀家総代会の勝頼公に対する畏敬の念は非常に篤く、平成の経石を埋納すべく東奔西走されていました。その甲斐あって平成21年11月20日、墓の保存修理に際し経石の埋納式が執り行われ、百数十年と絶えていたのであろう行事に立ち合わせていただきました。

この場を借りて、末筆ながら感謝の意を表します。

#### 【参考・引用文献】

- 佐藤八郎・佐藤森三 1970 『甲斐国志』 大日本地誌大系45 雄山閣
- 山梨県立図書館 1968 『甲斐国社記・寺記』
- 上野晴朗・勝沼町 1968 『勝沼町史資料集成』
- 大和村村誌編纂委員会・大和村 1996 『大和村誌』上巻・下巻
- 甲斐志料集成刊行会 1981 『狭川紀行』『甲斐志料集成』 3 日紀紀行篇 歴史図書社
- 甲斐志料集成刊行会 1981 『理慶尼記』『甲斐志料集成』 8 繫幕・補遺篇 歴史図書社
- 塩山市史編さん委員会 1999 『塩山市史 通史編』 上巻 関口貞通 1967 『向嶽寺史』 人本山向嶽寺
- 竹石健二ほか 1984 『田野平遺跡』 大和村教育委員会
- 山梨県観光文化財センター 2001 『民間信仰遺跡分布調査報告書』 山梨県教育委員会
- 山梨県考古学協会 2007 『武田勝頼墓発見の経石を考える』『山梨考古』第104号
- 畠大介 2010 『甲斐国の五輪塔と宝篋印塔を一対とする造塔法』『武田氏研究』第41号 武田氏研究会
- 大和村教育委員会 2003 『大和村の文化財』
- (経石調査)
- 江戸・蓮華研究会編 『墓と埋葬と江戸時代』 吉川弘文館
- 荻川真一編 『墓と葬送の中世』 高志書院
- 菅原信海 『日本仏教と神祇信仰』 春秋社
- 『展望』 日本書紀 5』近世社会 東京堂
- 松澤弘道 『お経の基本がわかる小字典』 PHP新書
- 木村得玄 『初欣祝 現代語訳と解説』 春秋社
- 桜井秀雄・鎌田茂雄 『お経 梵宗』 講談社
- 坂本幸男・岩本裕 『法華經』 岩波書店
- 中村元・紀野一義 『般若心経・金剛般若経』 岩波書店
- 萩山嘉一郎 『宝篋印塔の起源』『純五輪塔の起源』 藝術出版社
- 帝京大学山梨文化財研究所 『中近世石造物と社会』『帝京大学山梨文化財研究所研究報告第10集』
- 出代孝 『近世の経石について』『甲斐路 100号』 山梨郷土研究会
- 十箇駿武 『石工と石切り場の歴史』『山梨県史研究 第3号』
- 持田友宏 『都内地方に分布する伊奈石製宝篋印塔について』『山梨県史研究 第13号』



■1 武田勝頼の墓



■2 武田勝頼の墓

写真図版 2 (18年度)



■ 1 右基壇経石出土状況



■ 2 右基壇経石出土状況(清掃後)



■ 3 右基壇出土「戒名文字資料 R 1-001」



■1 右基壇2層目



■5 右基壇充填土除去



■2 右基壇3層目



■6 基壇中段下段石解体



■3 右基壇盛土



■7 右基壇充填土半截



■4 右基壇上段石解体

写真図版 4 (18年度)



■ 1 左基壇経石出土状況



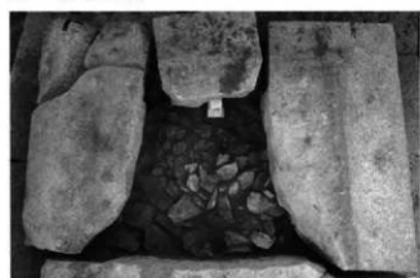
■ 5 左基壇上段石解体



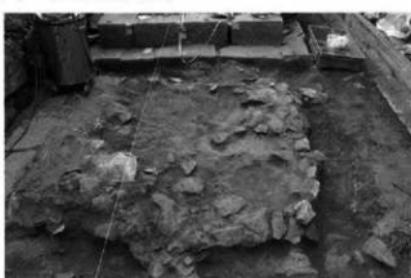
■ 2 左基壇2層目



■ 6 左基壇充填土除去



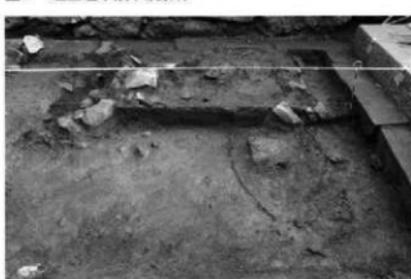
■ 3 左基壇3層目



■ 7 左基壇中段下段解体



■ 4 左基壇盛土



■ 8 左基壇充填土半截



■1 中央基壇発掘前



■4 勝頼の下部



■2 中央基壇発掘前



■5 北条夫人の下部



■3 中央基壇発掘前



■6 信勝の下部

写真図版 6 (18年度)



■1 勝頼埋土除去後



■4 勝頼1層目



■2 北条夫人埋土除去後



■5 北条夫人1層目



■3 信勝埋土除去後



■6 信勝1層目



写真図版 8 (18年度)



■1 勝頬4層目



■5 石室を仕切る石(勝頬石室北側)



■2 北条夫人4層目



■6 石室を仕切る石(勝頬石室南側)  
軽石の上に直書きされている



■3 信勝4層目



■1 中央基壇上段石解体



■4 作業風景



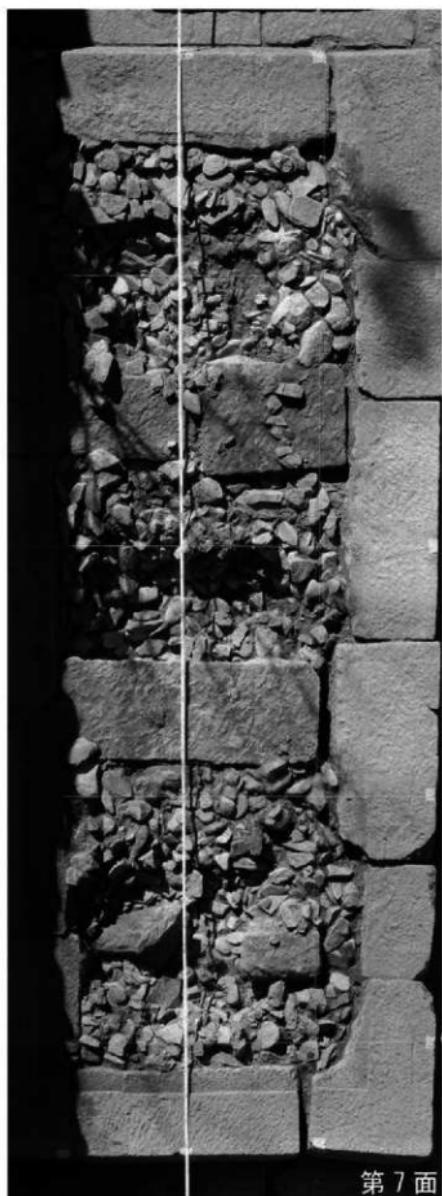
■2 中央基壇上段石解体(北から)



■5 作業風景



■3 中央基壇上段石解体(南から)



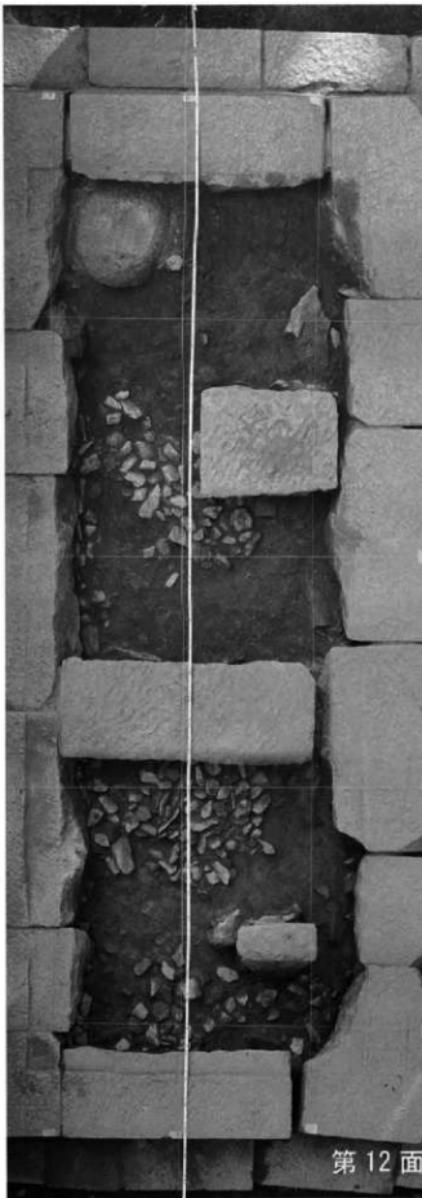
■7層合成



■8層合成



■11層合成



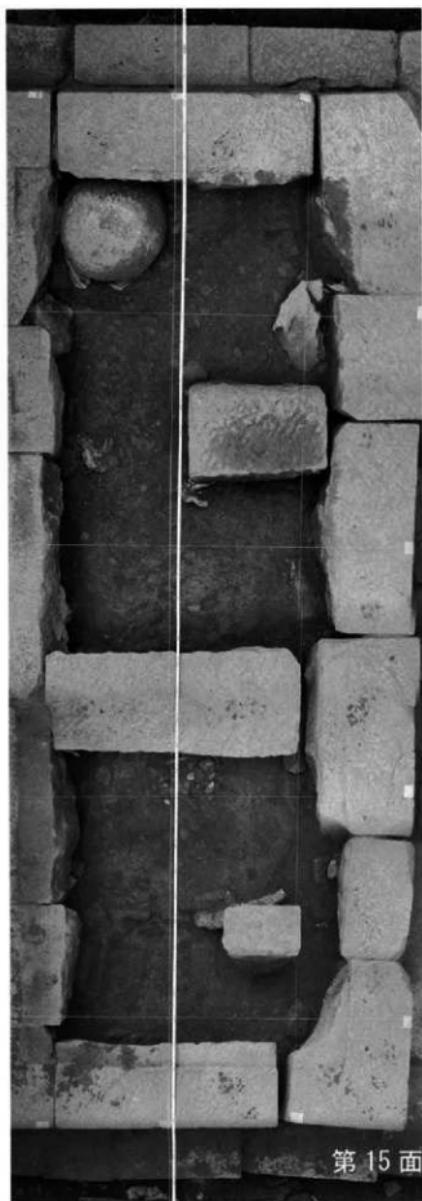
■12層合成



■13層合成

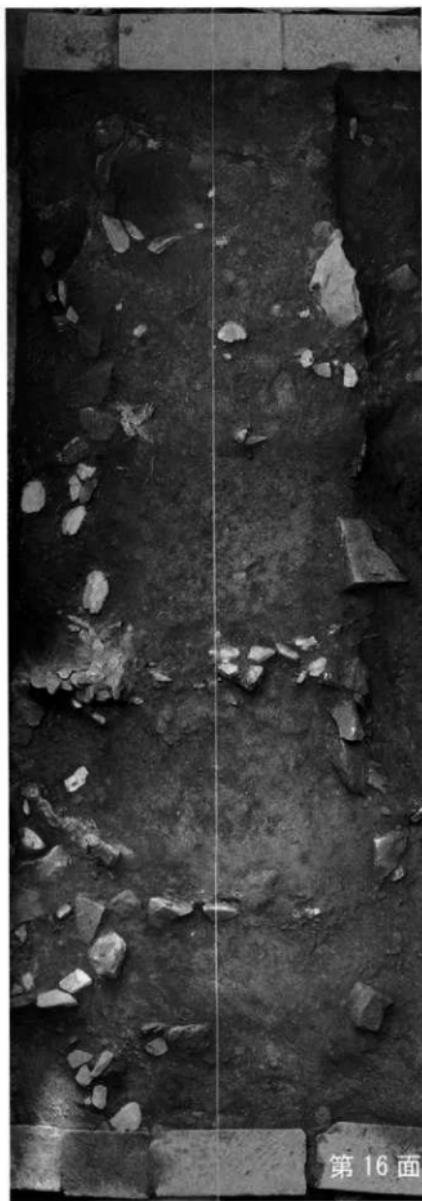


■14層合成



第15面

■15層合成



第16面

■16層合成

写真図版14(18年度)



■1 KY4-043



■4 KY4-062



■2 KY4-043



■5 KY4-062



■3 KY4-043



■1 KY7-143



■3 KY10-009



■2 KY7-143



■4 KY10-009



■1 R1-001



■2 R1-001



■1 R3-004



■3 L1-087



■2 R3-004



■4 L1-087

写真図版18(18年度)



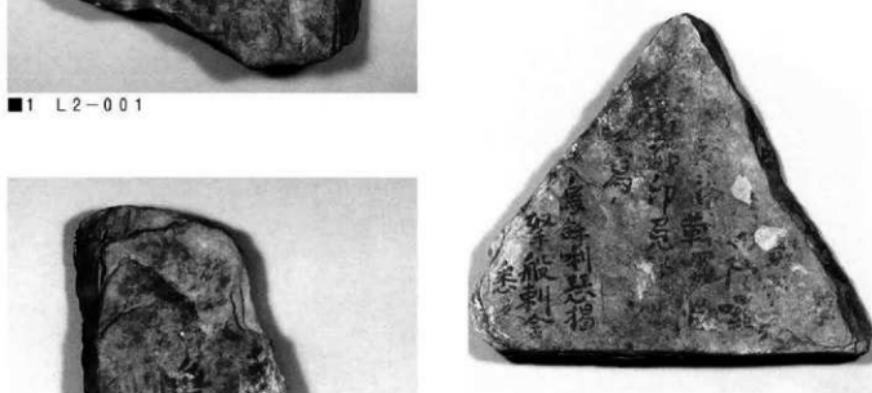
■1 L2-001



■2 L2-001



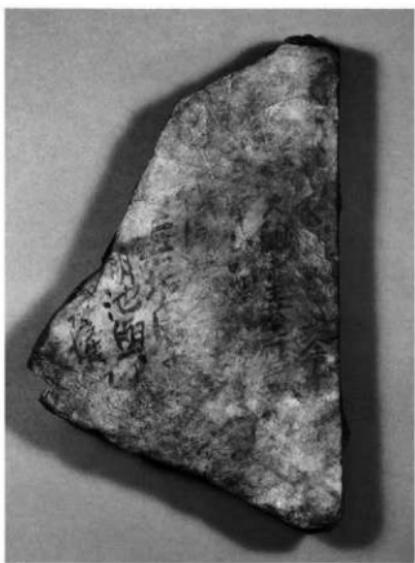
■3 L2-045



■4 L2-045



■1 L2-049



■3 L2-086



■2 L2-049



■4 L2-086

写真図版20(20年度)



■1 発掘調査前(甲将殿正面)



■2 発掘調査前(甲将殿北側)



■3 発掘調査前(墓・石垣)



■4 発掘調査前(墓北側)



■5 発掘調査前(墓南側)



■6 発掘調査前(墓)



■7 発掘調査前(墓)



■8 発掘調査前(甲将殿北側)



■1 E1トレンチ着手前



■5 E1トレンチ中央基壇版築状互層



■2 E1トレンチ着手前



■6 E1トレンチ中央基壇下部の砂礫層



■3 E1トレンチ着手前



■4 E1トレンチ着手前

写真図版22(20年度)



■1 E1トレンチ掘削後(左基壇左端)



■5 E1トレンチ掘削後(中央基壇右半)



■2 E1トレンチ掘削後(左基壇左半)



■6 E1トレンチ掘削後(中央基壇ー右基壇境)



■3 E1トレンチ掘削後(左基壇ー中央基壇境)



■7 E1トレンチ掘削後(右基壇)



■4 E1トレンチ掘削後(中央基壇左半)



■8 E1トレンチ掘削後(右基壇右端)



■1 E1トレンチ柱状木製品出土状況(1)



■2 E1トレンチ柱状木製品出土状況(2)



■3 E1トレンチ柱状木製品出土状況(3)



■4 E1トレンチ柱状木製品取り上げ後



■5 E1Nトレンチ東壁



■6 E1Nトレンチ北壁



■7-1 E1トレンチ出土柱状木製品



■7-2 E1トレンチ出土柱状木製品

写真図版24 (20年度)



■1 E2トレンチ石垣解体



■5 E2Nトレンチ土層断面



■2 E2トレンチ石垣解体



■6 E2Sトレンチ土層断面



■3 E2トレンチ石垣解体完了



■7 E2トレンチ完掘



■4 E2トレンチ土層断面



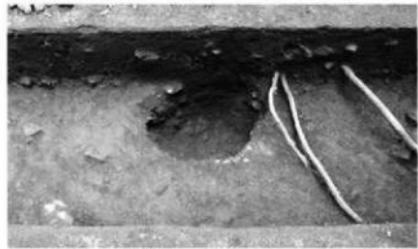
■8 E2トレンチ完掘



■1 W1トレンチ(北から)



■2 W1トレンチ(南から)



■3 W1トレンチ土壌



■4 W2トレンチ(南から)



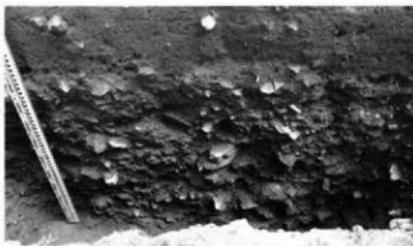
■5 W2トレンチ(北から)



■6 W1Nトレンチ掘削状況



■7 W1Nトレンチ発掘



■8 W1Nトレンチ砂礫層

写真図版26(20年度)



■1 N1・N2トレンチ石列検出状況(東から)



■2 N2W・N2Eトレンチ石列検出状況(西から)



■3 N2W南壁土層



■4 N2Wトレンチ北壁土層



■5 N2W・N3トレンチ



■6 N3トレンチ(東から)



■1 C1Nトレーニチ



■5 作業風景



■2 C1Sトレーニチ



■6 作業風景



■3 C2トレーニチ(西から)



■7 作業風景



■4 C2トレーニチ(東から)



■8 現場説明会風景

# 報告書抄録

## 報告書概要

ふりがな	やまなしけんしていしせき たけだかつよりのほか
書名	山梨県指定史跡 武田勝頼の墓
副題	経石出土に伴う総合調査報告書
シリーズ名	甲州市文化財調査報告書 第7集
編著者名	甲州市教育委員会 飯島 泰
発行者名	甲州市教育委員会
編集機関	甲州市教育委員会 生涯学習課 文化財担当
所在地・電話	〒404-0045 山梨県甲州市塩山塩山後240 電話0553-32-1411
印刷所	株式会社ケイ・トゥー・ワン
発行年月日	平成22年 3月31日

## 遺跡概要

遺跡名	山梨県指定史跡 武田勝頼の墓
所在地	山梨県甲州市大和町田野389
	25,000分の1地図 箔子
	位置 北緯35度38分26秒 東経138度48分09秒
市町村コード	19213
主な時代	江戸時代
種別	墓
主な遺構	二百年連忌の供養塔(安永4年=1775年)
主な遺物	経石、木製品
調査期間	平成18年12月18日～平成22年3月1日

## 山梨県指定史跡 武田勝頼の墓 —経石出土に伴う総合調査報告書— 2010

編集 甲州市教育委員会 生涯学習課  
山梨県甲州市塩山塩山後240  
0553-32-1411  
発行 甲州市教育委員会  
平成22年3月31日  
印刷 株式会社ケイ・トゥー・ワン

奉天瑞書者

安永九年  
七月日

仰慕三公  
仰慕三公  
上來諷誦金剛  
上來諷誦金剛  
省悟嚴神咒  
省悟嚴神咒  
景德院般若山勝公大座法雲院甲子殿  
景德院般若山勝公大座法雲院甲子殿  
詣受陀羅尼所傳功德  
詣受陀羅尼所傳功德  
北寺院般若山勝公大座法雲院甲子殿  
北寺院般若山勝公大座法雲院甲子殿  
爲佛果菩提各同圓滿知者十方三世  
爲佛果菩提各同圓滿知者十方三世  
功德  
功德  
密宗傳持上座  
密宗傳持上座